

智慧 それは

神の息づかい

目次

なにも問わない	1
人生は窮め難く広くて深い	2
人生の事実	3
誠実な友は命を保つ妙案	4
神は人の思惑の線上にはいない	5
相手をわきまえよ	6
知恵それは神の恵づかい	7
お前の為に定められていることに熟慮せよ	8
その行きつく先は暗黒の深淵	9
当たり前のすなおな智恵	10
物と心、肉体と精神	11
神からはなれて人はない	12
「すべての不義に心せよ」	13
神を畏れることは	14
肉体と精神との「正食」をとる	15
神の大決定に気づく	16
知識よりも正しい知恵を	17
信仰人の生き方	18
生きる秘訣をいたたく	19
「わたしは有るといふ者」	20

虚仮なる世間を生きぬく	21
理解と協力	22
自分自身とどのように付き合うか	23
導師に出会う	24
人間は素晴らしい	25
「言葉を語る」ことの秘密	26
過ぎ行く世を生きる有り難さ	27
何よりもまず	28
礼拝することの大切さ	29
人の知恵と神の智慧	30
悪い者から救って下さい	31
聡明な人は皆知恵を知っている	32
信仰の知恵	33
思いが固まると形(もの)になる	34
理屈をこねるな見栄はるな	35
忍の一事は衆妙の門	36
生きる喜びが生まれて来る	37
神こそ最善の友	38
人の行いは神の前にあらわ	39
虚仮なる人生のなかに有って	40
友を見出せば宝を見つけたも同然だ	41

なにも問わない

松下昌義

わたしの語ることを聞け、敬虔な子らよ、
流れのほとりに育つばらのように、若枝を出せ。

乳香のように香りを放ち、
ゆりのように花を咲かせ、

声をあげて、共に賛美の歌をうたえ。

すべての御業のゆえに神をほめたたえよ。

神の御名をあげ、ひれ伏せ。

賛美の声をあげ、堅琴を弾き、

神を大いにほめたたえよ。

賛美して、こう言おう。

「神の御業は、すべてすばらしく、

命じられたすべてのことは、

時がくれば実現する。」

軽々しく、こう言ってはならない。

「これは何か」「これは何のためか」と。

いずれの問いも時が来れば答えが与えられる。

すべての人の業は神の前にあり、

神の目から逃れられるものはない。

神は永遠から永遠まで目を注がれ、

神にとって驚くべきものは何もなし。

軽々しく、こう言ってはならない。

「これは何か」「これは何のためか」と。

それぞれ目的があつてつくられたのだから。

—シラ書(集会の書)三九章一二節以下—

× ×

「我を^がはって」生きているかぎり、世界や人生の本
当の姿は見えせん。

「我」とは、「自分自身を主張する意識」のことであり、
「はる」とは、「必要以上に激しい状態」のことです。

人は、自分の考え、自分の願望、自分の生き方、自分の
見識、自分の……。自分、自分、自分……世の中は自分
の思いで充満し、ふくれふくれて、はちきれそうです。

自分の思いだけが満ちて、互いに我を^がはっている世の中
に生きている私たちは、どの人も皆、孤独です。共に居る
ようで、その実、共ではなく。理解しあっているようで、
その実、不安があり。楽しく笑っているようで、その実、
寂しさがあふ。近くの人であるようで、その実、とても遠
い人のように思う。

孤独と不安は、誰かとの関係に於いてだけでなく、自
分と自分自身との関係のなかにもあります。自分自身をど
のようにすればよいのか、わからない。自分に自分がど
ようにつきあえばよいのか、わからない。そして、自分が
どのようになって行くのか、自分にはわからない。

結局、人には、まったく何もわからないのです。問題は
「わからない」ということではなく、「わからないのに、
わかろうとすること」が大問題なのです。わからないのが
当たり前なのに、そのことがわからず、わかろうとする事
が問題なのです。

なぜそうなるのでしょうか。それは本当の命の営みを知
らないからです。神さまを信ずるとは、本当の命の根源の
営みに目覚めることです。と言いますと、人は又、神に依
存してわかろうとします。すると、神依存症^{いよな}になって
しまい、神にあって我を^がはろうとします。「信仰の人」に
多くみられる症状です。大いなる命の根源である神に目覚
めるということは、何も問わなくなることです。

イエスはその安心の生き方をマタイ福音書六章二四節以
下三四節において、親切に教えてくださいました。



人生は窮め難く 広くて深味い

松下昌義

このように言ってはならない。

「わたしは神から身を隠そう。

いと高き所で、わたしのことを、

心に留めるものがあるだろうか。

大勢の群衆に紛れてしまえば、

わたしに気づくものはだれもない。

数え切れない被造物の中で、

わたしは一体何者か」

見よ、天と天の上の天、

大地と地下の海でさえも、

神が訪れると、揺り動かされるれる。

山や、大地の基も、

神がみつめると、共に震えおののく。

人の心は、そのことを考えようともしない。

神の道を思い巡らす者もない。

目に見えないはやてのように、

神の業の多くは隠されている。

だから、このように言ってはならない。

「だれが神の正義の業を告げ知らせるのか、

だれが、忍耐強くそれを待つだろうか」

これは心の狭い者の考え、

分別がなく、惑わされている人間が、

このような愚かなことを考える。

——シラ書(集会の書)十六章十七節以下——

× ×

「恐いもの知らず」という言葉があります。それは恐ろしいものあることに気づかず、うぬぼれや自信が強く何ものも恐れない様子のことです。このような

様子は一見、とても強そうにみえますが、ありていには「無智」(むち)ということですが。

無智とは、ただ知識がないことではなく、ものごとの

道理からはずれているのに、それに気づかず平気でい

ることです。そういう人を「無智蒙昧」の人というので

しよう。「蒙昧」の「蒙」も「昧」も道理にくらい意を

あらわすとのことです。

× ×

イエスはあるとき、私たちに隠されている人間の生死

の道理について、つぎのように語られました。

体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐

れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのでき

る方を恐れなさい。

——マタイによる福音書一〇章二六節以下——

私たちは、自分が身につけた体験や知識にもとづいて

物事を見たり、聞いたり、考えたりします。しかし、そ

れは「自分が作った枠」にすぎません。それは限られた

世界です。だのに、自分ももっとも正しいと思ひ込むな

ら「思いあがり」「無知蒙昧」です。

人間について、自分について、人生について、生と死

について、私たちが知っていることより、知らないこと

見えないこと、隠されていることの方が、はるかに多く

それらの世界は窮めがたく深い。

イエスはこれらの隠れている広く、深い人生の命の世

界の事実と道理とを教えてくださいました。

わたしがこの世にきたのは、見えない人たちが見え

るようになり、見える人たちが見えなくなるとなる

ためである。……見えなかったのであれば、罪がな

かったであろう。しかし、今あなたたちが「見える」

と言ひ張るところに、あなたたちの罪がある。

——ヨハネによる福音書九章四〇節以下——



人生の事実

松下昌義

お前はこう言ってはならない。

「今の自分は何の役にたつだろう。今後役に立つとしたら、それはなんだろう」と。

また、次のように言ってはならない。

「今の自分は満ち足りている。今後どんな災害がふりかかるといふのか」と。

人は、幸福なときには不幸を忘れ、不幸な時には、幸福を思い出さない。

死に際して、生前の行状に依じて報いることは、神によって、いとむたやすいことなのだ。

不幸に遭うと、すべての楽しみを忘れるが、人の行いの評価は、その最期に明らかになる。

どんな人に対しても死を迎えるまではその人のことを幸せだと言ふな、人間はその子供達によって、本当の姿が知られるのだ。

旧約聖書続編

シラ書(集会の書) 一章二三節以下

これは、教訓ではありません。人間に起こる事実なのです。教訓として受け取るなら、「そのように考えて生きねばならないのだろうなあ!」と言った道徳訓(モラル)にすぎません。

しかし、シラ書が語る事柄は、人生の事実であり、「わが身のこと」なのです。

×

×

人の愚かさは、目先のことしか見えず、今という時に振り回されてしまうことでしょう。

目先の苦しみや楽しみにと囚われるな。ことの善

悪を自分の基準で決定するな。おまえの人生についての神の配慮は、お前の思いをはるかに超えて働いているのだ!とシラ書は人生の事実を語っているのです。

×

×

「わたしは、何でも思いのままだ」と言うな。自分の欲望の力に引きずられ、自我の思いのままに生きてはいけない。

「だれもわたしを支配できない」と言うな。神は必ずお前に復讐なさるだろう。

「罪を犯したが、何も起こらなかった」と言うな。神は忍耐しておられるのだ。

「神の憐れみは豊かだから、数多くの罪は赦される」と言うな。神は憐れみだけでなく、怒りを持ち、その激しい怒りは罪人たちの上にくだる。

一日、もう一日と、引き延ばしてはいけない。神の怒りは突然やって来て、裁く時にお前を滅ぼしてしまうからだ。人を感わす財産を頼みとするな。いざというとき、何の役にも立たない。

シラ書 五章一節以下

×

×

「思い悩むな」とイエスは言われる。神が一人一人に与えて下さっている「真実の命」は何物にもかえがたく、神はその命をこよなく愛して支えてくださる、だから「思い悩むな」と言われる。

何時、何処にいても、どんな状態にあっても、神の大きい命のはからいに覚めていよう。人は、死んでも生きて神の命の中にいるのです。

誠実な友は 命を保つ妙薬

松下昌義

幸福なときには、真の友を見分けられない。不幸なときには、だれが敵かはつきりする。人が幸福なときには、敵はねたみ、不幸なときには、友でさえ離れていく。

決して敵を信用するな。彼の悪意は、緑青のように、人をむしばむ。謙遜な態度をとり、腰を低くしてやって来てても、用心して、彼を警戒せよ。彼に対するときは、鏡を磨くように自分を磨け。たえず磨いていけば、彼の錆で害を受けることはない。

蛇使いが蛇にかまれ、猛獣使いが獣にかまれたとしても、だれが同情するだろうか。罪人に近づき、その悪にむしばまれる者も同じである。

彼は、お前がうまくいっているときには、一緒にいるが、落ちぶれたときには、離れてしまふ。
— 旧約聖書統篇

シラ書一—二章八節以下—

人はそれほど強くはありません。自分が強い者のように錯覚し、やたら正義や愛をふりかざして、敵に向かうとき、結局、打ち破れ人を恨み、神を呪うことになり、最悪の場合、その敵と同類の者になりはてるでしょう。

敵のために自分の命を捨てる覚悟がなければ、敵から遠ざかることが肝要です。

× 誠実な友は、堅固な避難所。

×

その友を見いだせば、宝を見つけたのも同然だ。誠実な友は、何ものにも代え難く、そのすばらしい値打ちは計りがたい。誠実な友は、命を保つ妙薬。神を畏れる者は、そのような友を見いだす。神を畏れる者は、真の友情を保つ。友もまた、彼と同じようにふるまうから。

× シラ書 六章一—三節以下—

悪に対する時は、自分の念を鏡を磨くように磨き、透明な念を持っていなくてはなりません。汚れには汚れが、悪想念には悪想念が、自然に集まり、その悪は増幅をさらに倍加していき、ついには、自分で身動き出来なくなつて、悪の感覚が失われ、悪が日常化してしまいます。

×

×

もはや、わたしはあなかだかを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。神から聞いたことをすべてあなたがたに知らせるからである。

— ヨハネによる福音書一五章一—八節—

真実を語り、誠実に生きる友が、どの人にも必要です。誰かを非難攻撃し、絶えず愚痴を言い合ひ、不安と不満の思いを交わすだけの友は本当の友ではありません。それは「同じ穴の貉」でしかすぎません。

イエスは「わたしは、あなたを友と呼ぶ」といわれた。まさに、誠実な友は命を保つ妙薬であります。



神は人の思惑の線上にはいない

松下昌義

このように言ってはならない。

「わたしは神から身を隠そう。天で、わたしのことを、心に留めるものがあるだろうか。」

大勢の群衆に紛れてしまえば、わたしに気づくものはいない。数えきれない被造物の中で、わたしはいったい何ものか。

見よ、天と、天の上の天、大地と地下の海さえも、神が訪れると、揺り動かされる。

全世界は、神の御心によって生み出され、また、御心によって造りあげられていく。

山や、大地の基も、神が見つめると、共に震えおののく。人の心は、そのことを考えようともしない。神の道を思い巡らす者もない。

目に見えないはやてのように、神の業の多くは、隠されている。

だから、このように言ってはならない。

「だれが神の正義の業を告げ知らせるだろうか。また、だれが、忍耐強くそれを待たうか。」

神が人に約束なさった救いの実現は、はるかかなたにあり、神によるすべての者の取り調べは、最後に行われるのだから。

これは心の狭い者の考え、分別がなく、惑わされている人間が、このような愚かなことを考える。

旧約聖書統篇

シラ書十六章一七節以下

×
知らないのに知っているかのように振るまい、分らないのに分かっているように語るには滑稽です。

しかし、分かっているのに、分かっていると確信して語るのには、確信犯的行為と同じだと思います。

この世には資格試験があり、事柄について評価基準等がある、適切な人が選ばれ、社会でそれなりの働きが許されることになります。

ところが、宗教や信仰を説く人の場合、およそ資格や基準ということについては無法地帯だといえます。

×
勿論、それぞれの宗教教団で、その資格や評価基準が定められ、適格者だと認められた者に宗教活動が許されることになっているようですが、しかし一般に宗教の世界に於ける場合、資格基準など作れないのが本当のところだろうと思います。

×
一般的に宗教が説くそれは、例えば死後の世界と云っても、だれも見えて来て正しい情報として知らせる事は出来ません。天国も地獄もある意味ではこの世から類推し想像したものだと言われても、否定も肯定も出来ないのです。「私は体験した」と言われてもまた、教典にそのように書いてあると言われても、それを信じる者はともかく、信じない者にとっては全く価値はありません。

×
宗教や信仰の世界は、この世の体験や知識や感情や意志等の枠内で確信した世界に連なるのではなく、人が自身に与えられていて、未だ、働かせていない霊が人ではなく、神の霊の働きかけと同時的に活性化することで、開眼させられる神の智慧です。この智慧に開眼せず、宗教の人が神を語るなら人を惑わす確信犯者となるかも知れません。ああ、恐ろしや！

相手をわきままえよ

松下昌義

善い業をするときには、相手をわきままえよ。そうすれば、お前の善い行いは感謝される。信仰深い人に善い業をなせ。そうすれば報いがある。たとえ彼から受けなくても、いと高き方が報いてくださる。

悪事にしがみついている者や、慈悲の心を持たず、施しをしない者には、幸福はやって来ない。謙遜な人に善い業をせよ。しかし、不信仰な者に施すな。不信仰な者に施すあらゆる善い業は、二倍の悪となってお前に返って来るだろう。

神も、罪人を憎み、不信仰な人にあだを仕返される。神は、報復の日まで、彼を監視しておられる。

善人には与えよ。しかし、悪人には援助するな。

旧約聖書統篇

シラ書一二章一節以下

「シラ書」は旧約聖書の「箴言」と同じように神への敬虔な信仰にもとづいて、日常生活と人生問題についての指針が具体的に記されています。

表記の文章は「善いわざをなすときには、相手をわきまえて行いなさい」と教えています。

×

×

「わざ」にしても「ことば」にしても、それは与える側と、それを受ける側、との関係で成り立っています。ですから、その両者の関係が良好でなければ

ば、与えたものが正しく機能しません。例えば、Aさんが語った事をBさんが正しく聞きとってくださらなければ、Aさんが語った内容はBさんにとどきません。それどころか、聞き手のBさんが偏見をもってそれを聞かぬなら、AさんとBさんとの人間関係は一層ゆがんでしまいます。また、Aさんが善い物をBさんに与えても、それをBさんが悪い事に用いてしまうなら、折角の善い物も無駄になるばかりか、困ったことになってしまいます。

×

×

このような場合、AさんはBさんにどのように対処すればよいのでしょうか。シラ書は「与えるな」と言います。これは大切な見識です。その見識から、何かを語り、何かを与えるときには「相手をわきまえて為せ」とシラ書は言います。

×

×

イエスさまはおっしゃいました。神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならぬ。それを足で踏みじり、向きなおってあなたにかみついてくるだろう。

— マタイによる福音書七章六節 —

「与えない」ということは「憎む」ということではありません。「黙す」（もだす）ということなのです。かってイエスさまは、自分を裁判にかけ、処刑しようとする祭司長や長老、またローマの総督等の尋問に「なにもお答えにならなりました」。この「沈黙」は「待つ」ことであり「赦し」であり「祈り」です。



知恵 それは 神の息づかい

松下昌義

知恵の倉には、知識に満ちた箴言がある。
しかし罪人は、敬神の心を忌み嫌う。

知恵を熟望するならば、神の掟を守り通す
がよい。神は知恵を豊かに与えて下さる。

神を畏れることは、知恵であり教訓である。
神は誠実と柔和を喜ばれる。

神を畏敬することをいとうな。
二心をもって神に近づいてはならない。

旧約聖書統篇

シラ書(集会の書)一章二五節

知識とは道具、知恵とは知識を働かす源動力で
す。立派な知識を沢山身につけていても、それを
用いる人が正しく清く用いなければ、その知識は
災いを生みます。大切なことは知識ではなく知恵
です。

知恵は、いつも、より高いもの、より清いもの
知られざるものに、喜んでみずからの身を捧げよ
うと滾(たぎ)っています。それは神の願いの現
れ、神の愛の息づかいです。ですから人が自分の
雑念を静ませ、心を空っぽにするなら、神の息づ
かいとしての知恵が、聞こえ追ってくるでしょう。

神を知るとは、その息づかいを心に聞き、身に
受けるところです。今、自分が生きていくことは、
神の息づかいによって、生かされているというこ
とに、理屈抜きで感謝できることが、知恵に目覚
めることです。

知恵は人の側のものではなく、神の息づかいで
す。ですから、神の知恵は万物に満ちあふれ、ど
の人も無条件に優しく包み生かす働きをしていま
す。知恵は命のたぎりです。愛です。それは初め
からあり、今あり、永久にありつづけます。人が
生きる其処にあり、人が死すとも死者の靈魂のそ
こに有りつづけています。まさに死んでも生きて
も神の知恵なる息づかいの内です。

神の、愛に満ちた命の息づかいを聞くことが信
仰であり、敬神であり、神への畏敬にほかなりま
せん。罪人とは、そして野蠻とは、万物を生かす
神の息づかいに愛を感じないことです。まさに「
罪人は敬神のこころを忌み嫌う」とあるとおりで
す。

シラの書は「神を畏敬することをいとうな」と
すすめます。人間が自分の知識だけを、万能とな
し、それを自分の利己的な心で器用に用い働かせ
るなら、世界に争いは絶えず、また個人の生活に
悩みと不幸は消え去らないでしょう。

人間のいささかの知識が、神を畏敬することを
いとわせるなら、そのような知識は捨て去るがよ
いでしょう。高慢はすべての争いと災いとの原因
であります。

いまだかつて神を見た者はいません。わた
したちが互いに愛し合うならば、神は私たち
の内にとどまってくださり、神の愛がわたし
たちの内で全うされているのです。

新約聖書 ヨハネの手紙四章十二節

お前の為に

定められていて
ことに熟慮せよ

松下昌義

子よ、何事をなすにも柔和であれ。そうすれば、施しをする人にまして愛される。偉くなればなるほど、自らへりくだれ。そうすれば、神は喜んで受け入れてくださる。自分の高い人や著名な人は多い。しかし、神の奥義は柔和な人に現される。お前の力に余ることを知ろうとするな。また、手に負えないことを探究しようとするな。お前のために定められていること、それを熟慮せよ。お前に示されていないことを知る必要はない。出来ないことに手を出すな。おまえに示されたことは既に人間の理解を越えたものだから。多くの者は早合点して道を誤り、誤った判断でゆがめてしまった。知識が無いのに知ったかぶりをするな。

旧約聖書統編

シラ書(集会の書)三章一七節以下

人々が自分の外に関心を持ち、それらを探究することに熱心になっていた当時、古代ギリシャのソクラテス先生は、「汝自身を知れ」と教えました。それ以後の哲学は人間の探究に向かうようになつたそうです。

たしかに、私たちは自分の事は棚に上げ、他人のことや社会の出来事に身も心も熱心に働かせます。しかし、聖書は自分自身に自分の思いを向けることを勧めます。「自分の外の事に思いを向けるのも大切だが、自分自身に思いを向ける事も大切なことです」と教えます。

自分自身に思いを向けるということは、自分の存在について考えることです。それは哲学者のようになんか難しく考えることではなく、自分が生きている根っこ、つまり生きている自分の土台に目を向けるということです。そうすると、自分は自分で生きているのではなく、自分は生かされている者であり、さらに、自分を生かしていただく目に見えない神に、自分の思いを向けるようになります。それが、自分自身を知るということです。

自分を生かしている本当の命を知るとは、生きる安心を得ることです。そこで得る「安心」にまさる「安心」は他の何処にもありません。それは自分の人生にかけがいのない宝を持つことです。このような安心の宝を得た人は、自分の人生に余裕が生まれ、その余裕から「柔和心」が出て来ます。その人は威張らず高ぶらず、知ったかぶりをすることで安心を得ようとする「ケチ」な思いを持つことも無くなります。

「お前のために定められていること、それを熟慮せよ」とシラの書は教えていますが、それは自分自身の根っこに躍動する神さまの大いなる御愛のお支えと御心とに目を向けよ、と言うことではないでしょうか。一人一人に対する神の御心は、その人の理解を越えており、多くの人はそれを、自分の思いだけで早合点して、誤った推測と判断との道に落ちて行くと、教えています。

私たちが生きている足下に、「今」神の支えが無条件に躍動していることに気づき、自分の人生の土台に「大安心」をいただきましよう。

その行きつく先は 暗黒の深淵

松下昌義

友よ、お前は罪を犯した。二度繰り返すな。
過去の罪については、赦をこいねがえ。

蛇を避けるように、罪を避けよ。

近寄れば、噛みつかれてしまう。

その歯は獅子の歯のようなもの、

人の命を奪い取る。

あらゆる不法は、両刃の剣のようなもの、

その傷は、癒すすべがない。

威嚇と横柄は、富を損ない、

高慢な者の家は覆される。

訓戒を嫌う者は、罪人の道をたどる。

神を畏れる人は、心の底から、神に立ち帰る。

話術の上手な者の名声は、遠くまで知れ渡るが、

知恵ある人は、彼の話すべきことを悟り、感

わされることはない。

過分な借金をして家を建てる者は、石を集めて、

自分の墓を建てるようなものだ。

悪人の集まりは、麻屑の寄せ集めのごとし。

その終わりは、火の炎のように消えて無くなる。

罪人の歩む道は、平坦な石畳のようだが、

その行き着く先は、暗黒の深淵である。

シラ書(集会の書)二十章十八節以下

×

×

罪とは人の道から外れることです。人の道とは、神が定められた生き方のこと。神が定められた生き方は、良い地に落ちた種が育つ姿です。その育つ有り様をイエスは次のように言われました。

種を蒔く人が種蒔き出て行った。蒔いている間に、

ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。

他の種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは

土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると

焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種

は茨の間に落ち、茨が延びてそれをふさいでしまっ

た。ところが、ほかの種は、良い地に落ち、実を結

んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるも

のは三十倍にもなった。耳ある者は聞けがよい。

一 マタイによる福音書一三章一節以下

どの人も、安心して生きて行けるように神は人間を創り、

そのために設えられたこの地上に万物を置かれました。し

かし、人は自分の利欲のために、この地上を石地にした

茨の地にしたたり、略奪したりする所としてしまい、せつ

かくの良い土地を、目茶苦茶(めちゃくちゃ)にし、一方に

富んで享楽にふける者、一方に貧苦に苦しむ者、虐げられ

餓死する者がいる歪んだ地上にしてしまいました。

本来の土地、それは神が設え(しつらえ)て下さった生

きる場です。それは良い土地なのです。なのに、人はその

土地に茨を生やし、石の地となし、蒔かれ育つべき種の命

を歪め、まともに育つことが出来ない所としてしまいました

た。そればかりか、良い地に蒔かれゆたかに実を結ぶはず

の種を奪ってしまうような暴挙を犯す者さえ現れたのです。

神に目覚めるとは、人が人らしくなることです。それは

神がしつらえた良い土地に素直に自分の身を置くことです。

そのとき、人は人らしく人生の実をゆたかに成らす事が出

来るようになるのです。このような生きる基本を忘れ、い

たがらずに策を練り理と欲に走るとき、結局、人は一見、平

な石畳を歩んでいるように思えても、その行き先は、暗黒

の深淵、自滅の淵なのです。



当たり前前の すなおなおな智慧

松下昌義

口を滑らすよりは、道ですべる方がました。
口を滑らして、悪人は速やかに没落する。

不作法な人間は場違いの話のようなもの。

愚かな人が、絶えずそれを口にします。

貧しさゆえに、罪を犯さないで済む人もいます。

その人は、仕事を終えて休むとき、

良心に責められることは何もない。

世間体を気にして、身を滅ぼし、

無分別な者に気をつかって、身を滅ぼす者もいます。

恥をかきたくないために、無理な約束をし、

いたずらに友を敵にまわす者もいます。

うそは、人間にとって醜い汚点、

愚かな人間は絶えずそれを口にします。

絶えず嘘をつく者よりも、盗人の方がましだ。

だが、両者とも、最後には破滅する。

嘘つきの性癖は、恥をもたらし、

その汚名は、いつまでも付きまとう。

— シラ書（集会の書）二十章十八節以下 —

シラ書は人の生きざまを見つめ、その悲喜こもこも

を格言風に語ることで、人が幸いに生きる智慧を教示

しています。

この書がユダヤの人によって記されたのは二千二百
年ほど前です。記された場所が異なり、記された時も
長く隔たっているにもかかわらず、これを読む人は、

その場所や時に関係なく、「そのとおりだねえ」と共感と
反省をおぼえさせられます。

シラ書が語る内容は、すべての人が幸いな日々を過ごす
ための「あたりまえの、すなおなおな智慧」です。

今日、私たちの周りには多くの知識は反乱し、さまざま
な情報が渦巻いています。そして、利己的な智慧だけがは
びこり「当たり前前の素直な智慧」が、見えなくなっている
ようです。

いつの時代にも、人は、当たり前前の素直な智慧を求めて
います。一日の業を終えて、「有り難かった」と思えるよ
うな日々を過ごしたいと願っています。さらに、人生を終
えるときも、「生かしていただいて、有り難うございます」
と手を合わせ、大安心をもって向こうの世界に行くことを
願っています。

シラ書には、「神」という言葉が殆ど出てきませんが、
注意深く読むと、そこには「大いなる命」即ち、「神」へ
の深い畏敬の念が満ちているのを感じます。その意味で、
シラ書は、ただの人生訓ではなく神を自分の生きる拠り所
としている人の内から生まれてきた智慧の書だと言えます

人は一人で生きてはいけません。見えない神さまの手の内
で生かされているのです。神さまが私たちに与えて下さっ
た「智慧」は、あたりまえのすなおなおな智慧です。それに
もとづいて人が生きるなら、すべての人が、否、すべての
動植物や自然環境が、幸いに、且つ、バランスを保ってあ
る事が出来るでしょう。

神さまを信じ仰いで生きるとは、「あたりまえの素直な智
恵」をいただいで生きるということなのです。



物と心、 肉体と精神

松下昌義

子よ、援助をする時には、相手を傷つけるな。施す時にも、相手をおとしめる言葉を吐くな。朝露は、熱風の季節に安らぎを与えてくれる。言葉の露は施しよりも、効き目がある。親切な言葉は、高価な贈り物にまさるではないか。

情け深い人は、両方とも備えている。愚かな者は思いやりがなく、小言ばかり言う。また、恩着せがましい人間の施しは、だれも目を輝かさない。

—シラ書（集会の書）十八章一五節以下—

謙遜で情け深い人は、神からも人からも愛されます。押しつけがましいところがない、それを謙遜と言います。また、損得をはなれて、その人を深く思いやることを、情け深いと言います。

謙遜の反対語は何でしょう。傲慢ということでしょうか。傲慢とは、偉いのは私だけだ、と思いつつ自分に語り、行うことです。

情け深いのは反対語は何でしょうか。冷酷だとすれば、それは、思いやりが全く無く、見るに耐えない酷い状態のことです。

今月の「シラ書」は「施し」と「言葉」が主題です。施しとは、弱い立場の人に無償で与えること、つまり、恵み、与える慈悲のことです。施しには、施される者への深い愛情が伴っており、そ

の愛情がない施しは、施しにはなりません。施すには金銭や物が伴います。施しは、物と心とが同時なので

す。物と心とが、完全に分離してしまい、かたや物質主義、かたや、精神主義になってしまいました。しかし物と心とは本来一つのもので、それは一枚の紙の両面のようなものです。私たちのも、肉体と精神とを同時に持つものです。肉体が病むと精神も病み、精神が病むと肉体も病みます。「身」という漢字は「からだ」とも読み、「こころ」とも読みます。

「物を受けるに心をもってし、心を与えるに物をもってする」と言われますが、その「物」とは具体的にということですが。

もし、人が着る物もなく、その日食べる物にも事欠いているとき、あなたがたのだけれど、彼らに「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役にたつでしょう。

—ヤコブの手紙二章一五節以下—

「心か物か・精神か肉体か」という理屈のことではありません。始めからこの世は人間も含めて、すべて物と心・精神と肉体が一枚としてあるのです。物と心・精神と肉体とが別々にあって、それが一つになるというのではなく、それは同時なのです。それが物であり心であり、肉体であり精神なのです。

このような事実を、しっかりわきまえないで先のシラ書を読むなら、その内容は「ありがたい格言」にな



神からはなれて 人はない

松下 昌義

姿、形が美しいからといって、人を褒めそやすな。また、外見によって人を毛嫌いするな。蜜蜂は、羽で飛ぶもののうち小さいほうだが、その作る蜜は最高に甘い。

身に着けている衣服を誇るな。

榮譽を受けるときでも、おごり高ぶるな。

神のなさることは計りしれず、その御業は、

人々に隠されているからだ。

力を誇る多くの支配者が土下座するはめに陥り、思いもよらぬ者が王冠をかぶることになった。

多くの権力者がひどい辱めを受け、高名な者たちが異国の人の手に渡された。

よく調べないうちに、とがめてはならない。

まず、じっくり考え、その後にはねるな。

よく聞かないうちに、答えてはならない。

他人の話に割り込むな。自分にかかわりのない事で、人と争うな。

ならず者たちの言い争いに加わるな。

旧約聖書続篇

シラ書十一章一節以下

人は姿や形に惑わされ、世間の風評に踊らされる。また、その肩書によって人の善し悪しを判断する。しかし、事や人の正否、善悪はどの人にも分からぬ。分かったような顔をして語る人は嘘つきです。

世の中に「偉い人」などいません。どの人も所詮は一人の「この世の人間」です。限りある肉体と限

りある知恵をもって、限りある事をなし、限られた時間を生かされ、時が来れば望んでも望まなくてもこの世からあの世へ連れ去られる者です。

人は、己の欲に惑わされ、自分の思いに引きずられる。他人を裁き、悪口を言い、うわさ話に明け暮れ、自分に都合の悪いことは隠す。あげくの果てに恨みや妬み、多くの悔いを残して、この世からとり去られてしまう者です。

コヘレトは言う。なんとという空しさ、なんとという空しさ、すべては空しい。

旧約聖書コヘレト一章一節

自分を誇ってはなりません。どの人も明日の自分に何が起るか知らない。死後自分がどのようなかわからない。自分の主人が自分だと思ふ者は、
X X
本当の安心を持つことはできません。

人の主人は神です。どの人も神にしつらえられた

この世に置かれ、生きることを許されているのです

「天は神の御座、地は神の足台」だとキリストは示されました。

神の命の恵みが躍動しているところ、それが天であり地です。しかし人はこの世を自分の欲のままに

支配し、憎しみと争い、破壊と悲惨の場にしてしまいました。神への畏敬の念を失う時、人の心から感謝と祈り、愛と赦しが無くなり、生きる喜び、深い

安心が消え、憎しみと争いだけの世となります。

神からはなれて人はなく、天にうらやみつけられない

地はない。神への畏敬を失い、人の奢りが満ちると

き、人の世は暗黒となり必ず自滅するでしょう。



「すべて」の不義に心せよ

松下 三義

神は、人間を土から造られ、再び、土に帰される。

神は、人間に一定の寿命を与え、

地上のものを治める権能を授けられた。

神は、人間に、判断力と言葉と目を与え

耳と、よく考えるための心とを授けられた。

神は、悟りをもたらす知識で彼らを満たし、

善と悪との区別を示された。

神は、人間の心に、

神を畏敬する心を植えつけられた。

それは人間に、神の業の偉大さを示すためであつた。

人間は、神の御業を宣べ伝え、神を褒めたたえる。

神は、人間と聖なる契約を結び、

神の裁きを示された。

人間の目は、神の大きいなる栄光を見、

人間の耳は、神の厳かな御声を聞いた。

神は言われた。「すべての不義に心せよ」

そして、人と人の交わりの掟を各自に授けられた。

一シラ書（集会の書）一七章一節以下一

×

神は言われる。「あなたは土なれば、土に帰る」

と。（創世記3・19）人間は土の塊まりです。

人間は限りある者。神ではありません。なんと

有りがたいことでしょうか。

限りある土塊にすぎない人間が、自分の本当の

姿を見ないで、自分が神であるかのように、誇り、何でも出来ると思い込んでいる。それは愚か、それは罪です。

限りある者、だからこそ神の栄光を仰ぎ見ることが出来るのです。だからこそ、神の偉大さに畏敬を覚え、自らを謙虚に出来るのです。限りある者だからこそ、永遠の命をいただけるのです。

しかし、人間は己を神とすることで、真実の神を失い、誰も制御出来ない貪欲で、癡猛なものとなってしまいました。

正しい者はいない。一人もない。悟る者もなく、神を探し求める者もない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。

善を行う者はいない。ただの一人もない。

彼らののは開いた墓のようであり、彼らは舌で

人を欺き、その唇に毒がある。

口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すに早く、

その道には破壊と悲惨がある。

彼らは平和の道を知らない。

彼らの目には神への畏れがない。

一ローマの信徒への手紙三章一〇節以下一

×

人間は地球に於けるもっとも傲慢者です。すべてを食いつくし、さらに傲慢者達が互いに争い、何もかも破壊してしまふ。

神から頂いた「神を畏敬する智慧と心」はどこに行

ってしまったのか。人間は滅びます。

人間は、自分の悪の重さで自分自身を暗黒の淵に沈めてしまふのです。

神は言われる。「すべての不義に心せよ」と。



神を畏れることは

松下昌義

神を畏れることは、誉れと誇り、
幸せと喜びの冠である。

—旧約聖書統篇

シラ書(集会の書)一章十一節—

神を畏れるとは、生きる支えを得るということ
です。今、私たちに欠けている大切なことは、一
人一人が自分の生きる支えを失ってしまっている
ことです。今日の人間社会、その身近な所、また
は遠く世界の様子を見ると、そこにはさまざま
な混乱が起こり、通常の思いや考えを越えた悲惨
な出来事に満ちています。一見秩序あると思われ
るそこを、よく見ると「やりたいほうだい」が横
行しています。それらには直接の原因がありましょ
う。しかし深く辿って行けば、どの人も自分の生
きる支えを失っており、存在の拠り所を持ってず
に不安が根本原因であることに気づきます。

人が自分を生かす支えを見失うとき、生きるこ
とが空しくなり、心身の秩序がくずれ、目先の欲
望にだけ振り回される者となります。人の心が乱
れるとき、大人も子供も、男も女も、その地位や
名誉に関係なく社会のあらゆる場に於いて混乱と
不安とが充満し、国家も民族も滅びにいたるでし
ょう。

今、人間に必要なことは人間性の回復でありま
す。そのために人は、それぞれが自分の生きる支

えを得ることであります。

生きる支えは、神を畏れるところに生まれて来
ます。人の欲望を満たすために神を求めるなら人
は必ず堕落します。神は人に生きる希望と力と知
恵と愛と安らぎを生ましめる根源であります。
そのことを深く知っていた信仰の人は次のよう
告白しました。

神を畏れることは、誉れと誇り

幸せと喜びの冠である。

神を畏れることは、心を楽しませ愛の道を歩
むことができる。

神を畏れることは、幸せな晩年を送り、臨終
の日にも、神から祝福を受ける。

神を畏れることは、知恵の初めである。知恵
は人の間に揺るぎない基を据え、人々は幾世
代にわたってそれに信頼をおく。

神を畏れることは、知恵に満たされ、人々は
知恵の果実に陶醉する。

神を畏れることは、平和の花を咲かせ、健康
を保たせる。

神への畏敬と知恵こそは、平和をもたらす神
の賜物。神を愛する者には誇りが増し加わる。

神を畏れることは、知恵の根源、そこから生
え出る枝は長寿である。

神を畏れることは、罪を退け、すべての怒り
を遠ざける。

—シラ書一章十一節以下—



肉体と精神との 「正食」をとる

松 下 昌 義

青春の日々こそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。

「年を重ねることに喜びはない」と、言う年齢にならないうちに。太陽が闇に変わらないうちに。月や星の光がうせないうちに。雨の後にまた雲が戻ってこないうちに。

—旧約聖書コヘレトの言葉十二章一節以下

何を食べ、何を飲み、どのような空気の中で生活するかにより、私たちの健康は左右されます。

節度なき暴飲暴食は肉体の健康を損ね、節度のある生活は健康を保ちます。それと同じように私たちが、何に関心を向け、何を考え、どのような人と関わるかによって、その人の精神の健康は左右されます。「朱に近づけば赤く、墨に近づけば黒し」と古語にあるとおり、人もその交わる友や関心を向けることがらによって、その人の精神は善にも悪にも感化されます。

飽食の国日本に生きる私たちは、今、自分の肉体の健康を維持するために、正しく飲み食いする「正食」について、真剣に考え出しました。しかし、或る人達はそれでもなお、肉体の健康についての配慮からではなく、自分の容姿のために、とくに、極端なダイエットをするという状況です。その結果、飽食しながらのダイエットという、ま

ことにわけの分からぬ節度なき愚を演じることになっています。

「正食」ということは、肉体の健康のことだけではありません。健康な精神を養い育てるための精神に関わる「正食」があります。

肉体と精神とは深い関わりがあります。「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」と言われますが、また一方「健康な肉体に健康な精神が宿る」とも言えましょう。

私たちの生は、肉体と精神が同時のもので。そして、問題は肉体と精神と言われる自分の「心身」をどこに置くかということです。心の置き所が肉体の置き所なのです。

今日、私たちの身边に、本当に自分を正しく置ける場所はありません。さまざまな情報の洪水の中身はすべて、この世の欲望をかき立てるものばかりです。正しい精神世界を提示するはずの「宗教」においてすら、神や仏やオカルトを、この世の欲望を満たす手段とするばかりです。

「心の正食」を熱心に求めねばなりません。でないと、だれもが必ず行き着く老年になって、惨めな死を迎えるだけの日々とより果てるでしょう。あなたのパンを水に流すがよい。月日がたつてから、それを見いだすだろう。

—コヘレト十一章一節—
今、切に願うことは「肉体と精神の創造主なる神」に心を向けることです。

神の大決定に 気づく

「昌義

隣人のどんな不正な仕打

傾るな。

また、決して横柄なふるまいをするな。

高慢は、神にも人にも嫌われ、不正はその
いづれからも非難される。

覇権は、民族から民族へと移り行く。その
原因は不正と傲慢と富である。

金銭欲の強い者こそ、最も不正な者だ。彼
は全く守銭奴になりきってしまふ。

土くれや灰にすぎぬ身で、なぜ思い上がる
のか。

今日、王であっても、明日は命を奪われる
人は死んでしまふと、すべてを失い、蛆虫
の餌食になるだけだ。

高慢の初めは、神から離れること、人の心
がその造り主から離れることである。……

高慢であり続ける者は、忌まわしい悪事を
雨のように降らす。それゆえ、神は想像を
絶する罰を下し彼らを滅ぼされる。……

神は、悪事を行う諸国民を根こそぎにし、
代わりに身分の低い人々を植えつけられた。

神は、悪事を行う諸国民の領土を覆し、地
の果てまで破壊される。

神は、悪事を行う人々を取り除いて打ち滅
ぼし、彼らについての記憶を地上から消し
去られる。人間は、高慢であってはならず、

激しい憤りをいだいてはならないのだ。

旧約聖書続編

シラ書（集会の書）十章六節以下

わたしたちは一人で生きていくのではない。他の
人や物との関わりの中で生きていくのであり、その
関わりがなければ、人は生きて行けません。空気と
の関わりで私たちは生きています。水との関わりで生
きています。食物との関わりで生きています。同じよう
に他人との関わりで生きています。関わりが私を生
かしているのです。そのように定められたのは神で
す。この人生の事実を知って生きることが、私たち
の基本的な心得です。

×

×

憤ってはならぬ。高慢になつてはならぬ、とは、
人間存在の基本を忘れてはならぬ、ということでは
したがって、神に畏敬をもつということは、特定の
宗教を選び、その信徒になる以前に、どの人も自分
以外の者や物との関わりによって生きるようにされ
ている神の大決定に気づき、関わるものに愛をもつ
て生きるということでは。

人が自分以外のものとの関わりに於いて生かされ
ていることを忘れ、神に対して感謝せず、人に対し
て高慢であるなら、その人がどれほど富と権力とを
得ても、その人の最後は自分の手で掘った滅びの中
へ自分をおとしめることになつてしまふでしょう。
なぜなら、神の大決定から外れた高慢な生き方だか
らです。「高慢は、神にも人にも嫌われる」のです。
何事も自分さえ良ければ、他人や他のものがどの
ようになつても知らぬ、と考える自分本位の高慢な
生き方は家庭も社会も国も世界も滅ぼしてしまふで
しょう。神さまが決定した人間の生き方の基本に気
づくことは人間の最も大切な心得です。これが、神
を畏敬するということでもあります。



知識ちしきよりちえも正しい知恵ちえを

松下昌義

すべての知恵は、神から来る。
神と共に永遠に存在する。

—旧約聖書統篇

シラ書（集会の書）一章一節—

「知識」と「知恵」とは同じではありません。
知識は、物事について知っていること。または理解している内容のことです。知恵とは、物事の道理がよく分かり、それらに対応処理出来る心の働きのことであります。

知識と知恵とは切り離すことはできませんが、同じではなく、そして、知恵が知識より先になれば、人間はものごとを正しく進めて行くことは出来ません。

知識は自動車というなら、タイヤであり、エンジンであり、ボディであり、その他多くの部品にたとえられます。それに対して知恵は、自動車を運転する者だといえましょう。正しく運転する者がいなければ自動車は正しく走り、その機能をよく発揮することはできません。

人間は知識を使って、高度な技術を開発し、物質的に豊かな社会を生み出しました。それはとても有り難い事だと言えます。しかし、その知識を動かし使う人間の知恵が正しくなければ、人間の

社会は忽ち地獄になってしまいます。その典型の一つが、高度な技術によって生み出された、原子爆弾や水素爆弾などの「核兵器」です。今日人間が保有している「核兵器」の量は、地球を何百回も破壊出来る程のものだといわれています。個人に於いても事は同じです。どの様な生活をして自分の人生を歩むか、ということを決定し方向づけるのは、その人の知恵によります。結局、最も大切なことは、人間がひとり一人、生きる知恵を何処に根ざすか、ということになります。

知識の泉は、いと高きところにいます神の言葉。知恵の歩みは、永遠の掟まじまじ。
神ご自身が知恵を造り、これを見て、価値あるものとされた。

知恵ある方はただひとり、いと畏き方、天におられる神である。
知恵は、他のすべてのものに先立って造られ、その悟る力も、永遠の昔から存在している。

—旧約聖書統篇知恵（シラ）の書一章—
正しい知恵が子供にも、大人にも必要とされている時代です。知識が増えて正しい知恵が必要な時代です。やたら知識のみを求める愚かさを私たちは、もう止めねばならない時が来ています。

神を愛することこそ、輝かしい知恵。神は、御自分を示すために、人間に知恵を分け与え、こうして、人は神を知るようになる。

—知恵（シラ）の書一章—

信仰人の生き方

松下昌義

生き物はすべて同類を愛し、人間もすべて自分に近い者を愛する。すべての生物は類をもつて群れ集まり、人間も自分に似たものと固く結び付く。

狼と小羊とがどうして共存出来よう。不信仰な者と信仰深い人もこれと同じである。ハイエナと犬は、どうして仲良くできよう。金持ちと貧しい者が、どうして和を保ちえようか。荒野のろばが、獅子の餌食となり、貧乏な人は、金持ちに食い荒らされる牧草となる。高慢な人にとって、謙遜が忌まわしいように、金持ちにとって、貧乏な者は忌まわしい。

金持ちがよろめくと、友人が支えてくれる。身分の卑しい人が倒れると、友人でさえ突き放す。金持ちがしくじると、多くの人が助けってくれ、言語道断なことを口にしてもかばってくれる。身分の卑しい人がしくじると、人々は非難し、道理に合ったことを話しても、相手にしない。金持ちが話すと皆静かになり、その話した事を雲の上まで持ち上げる。貧乏なもの話すと、「こいつは何者だ」と言い、彼がつまずくと、これ幸いと引き倒す。富は、罪に汚れていなければ、善である。貧乏が悪であるとは、不信仰な人の言うことである。

シラ書(集会の書)十三章十五節以下

シラ書は二千年も前に記された書です。しかし

その内容は「今日、記された」ようです。人間の生きざまは何時まで変わらないうです。

ここに語られている一つ一つの事を、あげつらい説明しなくても、誰もが、我が事、他人の事、世間の事として了解しています。これらの哀しい人間の生きざまを語りだせば、その哀しみ、怒り、矛盾、不条理は、人が生きている限り止まることがないでしょう。だからこそ、人は黙っているのです。

人間の哀しい生きざまは、どこから生まれて来るのでしょうか。それは、自分中心の欲からです。人間の「エゴイズム」からです。「エゴイズム」は、人の外側にあるのではなく、人の内側に有ります。その人の心の持ちようにあります。

自分中心の欲を捨て、自分が理想とする清く正しく、生き方を実行すれば「エゴイズム」が克服出来、無くなるではありません。清く正しい生き方をしようとするれば、かえって、その人は「エゴイスト」になっってしまうでしょう。なぜなら完全主義は何時でも完璧を求め、人と比較して自分を誇ったり、卑下したりして、自分を自分自身で縛り、その結果、自分の中に不安を持つようになるからです。

大切な心の持ちようは、人や世間がどのようなであっても、神は、ありのままの自分を受け入れ生かして下さる、という安心を自分の心に持つことです。そして、笑顔で人にも事にも接し、自分以上に力むことなく、黙々と、しかし軽やかに目のまえの業に励むとき、神さまは笑顔であなたの生活を導いてくださる。これを知っているのが信仰の人です。

生きる秘訣を いたただく

松下昌義

富の為の思い患いは身体を衰えさせ、
その富が心配で眠れなくなる。

夜通し続く心配で、うたた寝さえもできない。
重病が眠りを妨げるのと同じである。

金持ちは苦勞して財産を蓄え、

仕事を休んでぜいたくな生活を樂しむ。

貧しい者は勞苦しても、生きているのが精一杯で、
手を休めるとたちまち生活は困る。

金銭に執着するものは正しい者にはなれず、

金銭を追い求める者は金銭で道を踏み外す。

金銭がもとで多くの者が身を滅ぼす。

彼らは滅亡と顔を突き合わせていたのだ。

金銭は、それに夢中になる者には畏となり、

愚かな者は皆、そこにはまり込んでしまう。

精練潔白な金持ちは幸いである。

金銭を追い求めなかったから。

そういう人がいたら彼に祝意を表そう。

民の間で、驚嘆すべきことを行つたのだから。

金銭の誘惑に打ち勝ち、

申し分のない生き方をした者はだれか。

彼こそ誇るにあたいする者だ。

法を犯しえたのに犯さず、

悪事を行へたのに、行わなかった人はだれか。

その人の財産はゆるぎのないものとなり、

人々は彼の業を数え上げ、たたえるであろう。

— シラ書(集会の書)三一章一節以下—

× ×

「智者も善者も浮世を見るに、色と金には皆迷う。」これは、白隠の「草取り唄」の一節です。

色情に惑わされ、金銭に迷わされるのは、結局、人間の欲望が原因です。それについて彼は次のように唄います。

「善きも悪しきも他所から来ぬぞ。迷う我が身のころよ

り。」「惜しや欲しやと思ふが餓鬼よ。餓鬼の種とて外には

ないぞ。成るもならぬも心のままよ。」欲とは、自分の内か

ら生まれ出て来るものです。

人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて誘

惑に陥ちるのです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪

が熟して死を生み出す。

— ヤコブの手紙一・一四—
すべて口に入るものは、腹を通して外に出されること

が分らないのか。しかし、口から出てくるものは、心

から出て来るので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦

淫、みだらな行い、盗み偽証、悪口などは、心から出る

からである

— マタイ一五・一七—
冒頭の「シラ書」は、「金銭」や「欲望」が悪いと言って

いるのではありません。金銭や欲望に振りまわされず、それ

に上手に対処する知恵を持ちなさいと教えています。パウロ

は次のように言いました。

私は、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚え

たのです。貧に対処する術も、富に対処する術も知って

います。満腹していても、空腹であっても、いついかな

る場合にも対処する秘訣を授かっていました。私を強めて

下さる方のお陰で、わたしはすべてが可能です。

— フイリピ四章一一節—

神を信じて生きるといふことは、どのような場合において

も、人間として智慧深く豊かに生きる力としての秘訣をいた

だくことです。



「わたしは
有るといふ者」

松下昌義

天におられるわたしたちの父よ
御名が崇められますように。

—マタイによる福音書六章九節—

昔、モーセがミデアンの野で、はからずも神の
顕現に接し、エジプトで労役に苦しむ同胞を救い
出す使命を与えられました。そのとき、「あなた
のお名前をどのようにお呼びすればよいですか—
と尋ねたモーセに、神は、「わたしはある。わた
しはあるという者だ」と答えられました。その後
モーセはその神の名によって、イスラエルの民を
エジプトの支配から開放する歴史的な偉業をなし
とげたのです（旧約聖書出エジプト記三章以下）

「わたしは有るといふ者」とは、この世、あの
世を含めたすべての元で創造的に躍動する命その
ものことを意味しています。ですからモーセに
現れた神とは、私たちが生活している「ここ」で
創造的な力として働く命そのものだったのです。
私たちが生活している「ここ」という現場は、さ
まざまな悩み苦しみで満ちているところです。と
きとして喜びもありますが、腹立たしさや苦しみ
不安がはるかに多くあるところが「ここ」です。

「ここ」がどのような処であっても、私たちは
「ここ」でしか生きられません。だからどの人も
黙々と耐えつつ日々を過ごしています。表面的に

は何も言わなくても、こころの内に孤独をかみし
めて「ここ」で生きています。まさに、人生とは
重荷を背負って一人坂道を行くがごとし、と言え
ましょう。

でも、モーセの眼の前に現れた神は、「わたし
は有るといふ者である」と示されました。それは
理屈としての神の定義を示されたのではなく、私の
「父ちゃん」として、私が生きる出発点の「ここ」
で日々、刻々、私の足元を支える命として同行して
くださる方の自己開示だったのであります。

そのような神の支えは、昨日も今日も永久にか
わる事はない、というのが「わたしは有るといふ
者」なのです。どの人も、よくよく自分の足元を
見るなら、「わたしは有る」という創造的な命が
働き支えているのです。この世の中に「孤独」の
人は一人もいません。この神の事実に生きていた
イエスは、だからこそ、「神の御名こそ崇められ
よ」と祈ったのです。そうして「神の御名を崇め
る者としてください」と祈ることを教えてくださ
ったのです。

イエスは「隠れたところにいます神に、隠れた
ところで祈りなさい」といわれました。それは、
眼に見えないけれども、足元で支え働いている命
に、心の中で熱く祈りなさい、と言ふことです。
いつも、どこでも、どんなときにも「御名が崇
められますように」とお祈りしましょう。



虚仮なる世間を 生きぬく

松下昌義

やににふれば、手が汚れる。高慢な人と交われば、高慢な人間になる。

手に余る重い物を持ち上げるな。お前よりも力や金のある者と交わるな。土鍋が鉄鍋とどうして仲間になれようか。土鍋は鉄鍋にぶつかると砕けてしまう。

金持ちは不正を働きながら、しかも、脅迫する。貧乏な人は不正を受けながら、しかも、わびなければならぬ。

金持ちはお前が役に立つかぎり、利用するが、お前が困っているときは、見捨ててしまふ。お前に財産があると、親しげに寄つて来て、お前の財産を使い果たしても、平然としている。お前を必要とするときには、お前をだまし、ほほえみかけて、希望をもたせ、うまい言葉並び立てて、「お役に立つことはありませんか」と言う。

そして、御馳走をふるまって、お前を恐縮させ、今度は二度も三度も絞り取り、最後にはお前をあざ笑う。その後は、会っても知らぬふりをし、お前を無視して、顔をそむける。

用心せよ。だまされることのないように。自分の愚かさで落ちぶれることのないように。

旧約聖書統篇

シラ書(集会の書)十三章一節以下

×

×

シラ書は二千年も昔に記されたものです。しかし今日、これを読む大方の人は、その内容に共感なさるのではないでしょう。

二千年昔の人も、今の人も同じです。姿や貌は変わっても、人間の心は変わらないようです。同じ事で喜び、悲しみ、嘆き、怒り、嫉妬し、恨み、時に高慢になり、争い……。

人間をとりまく社会環境はその技術の力で便利になり快適になり、遠く宇宙に出て行けるようになりましたが、人の思いや心は少しも変わっていないばかりか、ひよっとすると一層に悪くなっているではないかとおもいます。

人間は進歩したのでしょうか。人間にとって進歩とは何なのでしょうか。

「世間虚仮」(せけんこけ)という言葉があります。「世間」とは「世の中」のことであり、「虚仮」とは「内心と実際の言行が一致しないこと」の意味です。すこし真面目に世の中を生きているなら「世間虚仮」ということが誰でも体感します。

シラ書は虚仮なる世間や人間を非難攻撃しているのではありません。シラ書が私たちに示すことは、「人間をよく見つめなさい」ということと、「愚かな生き方をしてはなりません」ということです。これをひっくり返して言えば、本当に真実なるものは神だけであり、神さまの真実を自分の生き方の土台にすえて、世間が虚仮であっても失望しないで知恵深く積極的に生きることを語っているのです。確かに神なき人生の最後は空しさだけが残るのではないかと思えます。



理解と協力

松下昌義

神を畏敬する人達よ、神の憐れみを待ち望め。

わき見をしてはならない。

さもないと道を踏み外す。

神を畏敬する人たちよ。神を信頼せよ。

そうすれば必ず報われる。

神を畏敬する人たちよ。神が賜るすばらしい

こと、即ち、永遠の喜びと憐れみを待ち望め

神は喜びに満ちた永遠の賜物を、報酬として

与えてくださる。

旧約聖書統篇

シラ書(集会の書)二章七節以下

どの人にも惑いがあります。疑惑があります。

不信があります。怒りがあります。ひそかな隠し

事があります。どれほどの親しい間柄の者にも、

語ることなく自分の内で引きずりつづけています。

とがあります。人の一生は秘密に満ちています。

×

×

この世に生きる者は根源的に孤独です。孤独は
人との間にあるものです。親子の間に、夫婦の間に、
友達との間に、職場における人間との間に孤
独があります。

孤独とは、その人自身の身になれない、という

事ではないでしょうか。その人自身の身になると

は、その人を深く理解するということだとも言え

ます。しかし、人間はその人自身の身になれるほ

どに、その人を理解することは出来ません。それ

は善悪のことではなく、だれでもが背負っている

人間の限界です。その事を弁えないで、互いに深
く理解が出来るのだと思うなら、その人は一生悩
み続けなければなりません。

×

×

人は孤独です。でも互いに協力は出来ます。互
いに助け合い、仕え合う事はできます。その意味
で、人間の幸福は、互いの身になって完全に理解
しあうことではなく、互いに協力し、仕え合うと
ころにあるのです。それが「仕合わせ」というこ
とです。深く理解しあう事と協力する事とを取り
違えてはなりません。

×

×

協力する事の極致は相手のために自分を捧げる

ということですが、少なくとも相手に対して、自

分の思いを相手にあげる「思いやり」がなければ

協力は成り立ちません。人は互いに支えあうこと

で、その漢字が示すとおり「人」になれるのです。

×

×

大切なことは協力であって、深い理解ではありません。
協力の基本は「思いやり」という愛です。
人が孤独であると言う自覚に於いて「思いやり」
という協力、協力という愛が生じてくるのです。

×

×

しかし、聖書は人と人との協力と愛とを説くだ
けでなく、神の愛を示しています。そして神こそ
人の心の深さを極め知る本当の理解者であること
を教えています。神は私たちの座るも立つも、思
うも感ずるも、見るも聞くも、こころの深きまで

すべてを知り給うてゐることを教えています。

神を畏敬することの有り難さと、偉大さがこ

こにあります。



自分自身と どのよつに付き合ふか

松下昌義

あなた自身を悲しみに渡すな。
あなたの思いわずらいによりて
自分の身を悩ますな。

朗らかな心は、人を生氣にあふれさせ、
喜びは長寿をもたらす。

気分を変えて心を喜ばせ、
悲しみを遠くへ追い払え。

悲しみは多くの人を滅ぼした。
それは何の益にもならない。

ねたみや、怒りは寿命を縮め、
思い煩いは人を老けさせる。

快活な心は食欲を旺盛にし、
食べ物をおいしく味わせる。

—シラ書(集会の書) 三〇章二一節以下—

人は関わりの中で生きる者です。人の関わりにはいろいろありますが、大きく分けますと四つの関わりになるようです。

一つは、自然との関わりです。

二つには、社会との関わりです。

三つには、人との関わりです。

そして、四つには、自分自身との関わりです。

以上四つの関わりのどれもが、人が生きて行く上で大切な関わりです。その中で、表記のシラ書で語られているのは、四つめに記した「自分自身との関わり」についてです。

自分が自分自身と、どのように関わってゆくか、ということとは簡単なようで、実は、とても難しいことです。

私たちは、他人との関わり、たとえば、親や兄弟、友達との関わり、妻や夫、子供、または舅や姑などとの関わりには、とても気をつかいます。また、社会との関わり、つまり社会で生きて行くうえでの約束や規則、世間体など、との関わりにも、毎日それなりに気をつかって生きています。しかし、自分自身と自分がどのようにつきあって行くか、ということには、自覚的に考えることはありません。でも、考えてみますと、関わりの中で、いちばん難しいのは自分が自分自身とどのように関わり、付き合っているかということではないでしょうか。

たとえば、自分が自分についていろいろと考えると言うことがあります。今日はどの服を自分に着せてゆこうか。あの人と、今日は会うべきか、会うべきでないか。自分の将来のために、自分自身をどのような方向に進ませべきか。自分はどうなってゆくのだろうか。……もつとも身近な自分自身について自分が「もてあます」ということがあることは、誰もが体験していることです。

自分が自分自身について考え配慮するその働きを「精神」と言います。生きている自分について、自分が考え配慮することが「精神」というなら、だれにとつても「精神の有り様」は、とても大切な事になります。精神のことを「魂」とも呼ばれています。人の精神・魂の有りが、その人の生き方を決めて行くのです。そして、魂(精神)を支えるものが「神」なのです。一つの出来事に会って自分が、損と受け取るか、得と受け取るか、感謝と受け取るか、それはその人の精神性(魂性)の問題なのです。



古くからの友人をなおざりにするな。

彼は、新しい友人に、はるかにまさる。

新しい友は、新しいぶどう酒。

古くなるほど、味わい深く飲めるものだ。

悪人の成功をねたむな。

彼にはどんな破滅がまっているか、

おまえは知らないのだ。

不信仰な人の成功をうらやむな。

彼らは必ず罰せられて陰府に行くものと心得よ。

出来るかぎり隣人を見極め、

知恵ある人に相談せよ。

聡明な人と語り合い、専ら、神の教えを話題にせよ。

正しい人たちと食事を共にし、

神を恐れることを、お前の誇りとせよ。

職人はその作品によって称賛され、

知恵ある為政者は、その言葉によって称賛される。

旧約聖書続篇

シラ書(集会の書)九章十節以下

友達をつぎつきと変えてゆく人かいます。その人は言います。「なぜ、私には親友ができないのだらうか」と。「親友という人がいるのではなく、親友は互いの関わりを経てつくられ、生まれてくるのです。

互いに相手への思いやりが親友という人間関係

を生みだすのです。どこか冷やかに斜めから人間を見つめていたり、自分勝手に、自分の思い込みで相手を振り回そうとする人には、親友という人間関係は生まれ来ないでしょう。

友がいけないことは人生の損失です。なぜなら、人は互いに支え合って生きる事で人に成るのですから。「人、その友のために己を捨てること、これほど大いなる愛はない」とイエスが語られる意味は、人間関係の深い有り様を示しています。

それにしても、「友を選ぶために時間をかけよ。それを愛えるためには、さらに時間をかけよ」と言う言葉にも注意を向けましょう。

自分の人生に「導師」を得ている人は幸いです。「導師」とよばれるに相応しい人とは、人間よりももっと高次の命の働きがあるという深い智慧を、人の魂に吹き込んでくれる人です。この世の知識や知恵を教えてくれる人は多い。しかし人間存在の秘儀を示せる人は少ない。一方で、そのような導師に本当に出会える謙虚さを備えた人は、さらに少ない。導師に出会っていても、ただの行きずりの人にしてしまいます。

×

×

×

×

人間は

素晴らしい

松下昌義

どんな被造物が尊敬に値するか。人類だ。
どんな人が尊敬に値するか。神を畏れる人だ。

どんな被造物が尊敬に値しないか。人類だ。
どんな人が尊敬に値しないか。神の掟（おきて）を破る者だ。

仲間の間では権力ある者が尊敬され、神の前では、神を畏れる者が尊ばれる。

神を畏れることは、神に受け入れられることの初め、

強情と高慢は、神に拒まれることの初めである。

聡明な貧しい人をさげすむのは、正しいことではない。

罪ある人をほめたたえるのは、相応しいことではない。

地位の高い人や判事や権力者は、栄誉を受ける。だが、神を畏れる者は彼らにまさる者なのだ。

自由市民が知恵ある奴隷に奉仕しても、分別ある人なら、それをとやかくは言わない。

旧約聖書統篇

シラ書（集会の書）十章六節以下

シラ書が成立したのは今から二千年前だと研究者は言います。しかし、その内容は今の人間を語っているようです。

人間世界は進歩した、発達した、発展した、

と、人は誇ります。しかし、人間の生きざまは二千年前と少しも変わっていません。同じように二千年前に生きた使徒パウロの言葉に目を向けて見ましよう。

善を行う者はいない。ただの一人もいない。

彼らのどは開いた墓のようであり、

彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。

口は、苦（にがい）のろいで満ちている。

その足は人の血を流すのに速く、

その道には破壊と悲惨とがある。

彼らはまことの平安の道を知らない。

彼らの目には神への畏敬の念がない。

人は賢そうな顔をしてりっぱなことを言います。人は偉そうに自分の主義や主張を掲げます。人は自分の地位や名譽を誇ります。人は美しく着飾って我が身を飾ります。しかし、その内は欲の固まり、虚栄の権化、嫉妬と中傷の渦。不信と懷疑と秘密の蔵そこには神への畏れはありません。最後に空しく暗闇のなかに消えていくだけです。

神を畏敬するとは、この世の宗教が掲げる神や仏に帰依することではありません。「○○宗教」に自分が属することでもありません。

この世のいかなる「宗教や宗教的」なものに属する以前に、人はすでに宗教的な存在として生かされているのです。一切の「我（が）」を捨てて素直になるなら、どの人も大いなる命を畏敬する者となるように有らしめられているのが人間なのです。人間とは素晴らしい者なのです。

シラ書が成立したのは今から二千年前だと研究者は言います。しかし、その内容は今の人間を語っているようです。

「言葉を読む」 ことの秘密

松下昌義

とがめるのに適切でない時があり、黙っている方が、分別を示すこともある。心の中で憤るよりは、とがめる方がよい。過ちを自ら認める人は、恥を免れる。情欲にかられて、

おとめを犯そうとする宣言のように、力づくで正当性を主張する者がいる。

黙っていて、知恵ある人と見られる者もあり、しゃべりすぎて、憎まれる者もいる。

答えられないために黙っている者もいれば、時をわきまえて、黙っている人もいる。

知恵ある人は、時がくるまで口をつぐむ。ほら吹きと無分別な者は、

時をかまわず、しゃべりまくる。口数の多い者は、嫌われ、

他人の語をおしのけて語る者は憎まれる。とがめられて改めるのは、なんと立派なことか。お前は故意に罪を犯さなくてすむ。

—シラ書(集会の書)二十章一節以下—

× 「口の虎は身を破り、舌の剣は命を絶つ」と言われ、その言いようが悪いために、身の破滅をまねくことがあります。「口は禍いの門」とは、私たちの日本人にはよく知られていることです。

× 新約聖書の「ヤコブの手紙」三章は、言葉について鋭い考察を記しています。「……私たちが度々過ちを犯します。言葉で過ちを犯さないならそれは自分の全身を制御できる完全な人です。」

馬を御するには、口にくつわをはめれば、その体全体を意のままに動かすことが出来ます。また、船をご覧なさい。あのようによく、強風に吹きまわっている船も、舵取りは、ごく小さな舵で意のままに操ります。同じように、舌は小さな器官ですが、大言相語するのです。

ご覧なさい。どんな小さな火でも大きな森を燃やしてしまう。舌は火です。舌は不義の世界です。私たちのからだの器官の一つで、全身を汚し、移り変わる人生を焼き尽くし、自らも地獄の火によって燃やされます。あらゆる種類の獣や鳥、また這うものや海の生き物は人間によって制御されていますし、これまでも制御されてきました。しかし、舌を制御できる人は一人もいません。舌は疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています。私たちは舌で神を賛美し、また舌で神にかたどって作られた人間を呪います。同じ口から賛美とのろいが出てくるのです。……」

—ヤコブの手紙三章一節以下—

舌や言葉が悪いわけではありません。舌をもって言葉を語らせるのは、人の心であり思いです。心が動き思いが固まって言葉となり行いとなります。問題は人の心であり思いにあります。「柔らかな言葉は憤りを静め、傷つける言葉は怒りをあおる」(箴言一五・一)「神に従う人の唇は多くの人を養う」(箴言一五・一)「神に従う人の口は命の源」(箴言一〇)

人は何を聞くかと言うことも大切ですが、それとひとしく、何を語るか、と言うことは一層大切です。語るとは心のことで、語る言葉によって人は自身を養い育てるのです。神を賛美することの秘密がここにあります。



過ぎ行く世を 生きる有り難さ

松下昌義

神を畏敬する人の霊は生き永らえる。

自分を救ってくださる方に、信頼しているから。

神を畏敬する人は何事にもおびえることがなく、

決して臆病風をふかさない。

神にこそ彼は信頼しているから。

神を畏敬する人の魂は幸いである。

彼は、だれを頼みとし、だれを支えとするのか。

神の目は、神を愛する者の上に注がれている。

神は、力強い盾、堅固な支え、

熱風から守る避難所、真昼の日差しを防ぐ陰、

転ばないように防ぎ、倒れないように助ける者。

神は、彼らの魂を昂揚させ、目に輝きを与え、

健やかな命と祝福を授けられる。

— シラ書（集会の書）三四章一四節以下 —

× せけんこけ ゆいみつせしん

聖徳太子との関連で「世間虚仮。唯仏是真」という

言葉が語られます。この言葉の意味は「世の中のもの

はすべて仮のものであって、本当に頼れるものはない。

本当に頼れるものは、目に見えない真の命である仏だ

けだ」と言うことです。

聖書も次のように教えています。

世も世にある欲も、過ぎ去って行きます。しか

し、神の御心を行う人は永遠に生きつづけます。

— ヨハネの手紙二章の一七節 —

どの人でも、この世を注意深く見るなら、世間が虚

仮なることに気づきます。しかし、だから世の中は

悪でつまらん、と言っではなりません。なぜなら「世の中」は、もともと「虚仮」なのです。世の中とはそういうものであって、それは善でも悪でもないのです。聖書の言葉で言えば「世も世にある欲も過ぎ去って行く」ものが「世」であり「世の欲」なのです。

×

「世も世にある欲も過ぎ去って行く」ことは、有り難いことなのです。なぜなら、「世と世の欲に」執着して生きてはならない、ということに気づかされるると同時に、本当の命が何であるかに開眼させてくれる契機となるからです。

世を超えた真実なる神を求道する心は、世と世の欲に執らわれている人からは生まれません。

×

誰でも人生のある時に、生きていくことの虚しさを強く覚える事があります。「私は、このままで、自分の人生を終えてしまつてよいのだろうか」という焦燥感、または不安感が一瞬、胸の内によぎることがあります。それは、自分の命の充実を求める自分の魂の求めです。この世を生き活きと生きるためには、世と世の欲だけを貪って日々を過ごすだけでは結局、自分自身を生きた事にはならないのです。なぜなら、それらはすべて「過ぎ行くもの」だからです。私たちの命を充実させ、その魂に生きていくことの充実感を与えるのは、永遠に変わらぬ神の愛に開眼することです。私たちが、「過ぎ行く」この世に生きていく意義は、永遠に変わらぬ神に開眼するための、言わば方便であり道具なのです。

冒頭に記した「シラ書」の著者は、過ぎ行く世と世の欲の世界を生きていることをとおして、人間に与えられた命を本当に燃焼させる生き方の秘訣を、自分の体験として証示してくれたのです。



松下昌義

どうして、ある日はほかの日よりも重要なのか。一年のどの日にも、同じ太陽の光が注ぐのに。

これは神の裁断によって区別される。神は季節と祝日とを定められた。

ある日を高めて聖なる日とし、他の日を平日と定められた。

人間は皆、大地からのもの、アダム（人）は土から造られた。

神は、あふれるばかりの知識によって、人々に違いをつくり、

それぞれに、異なった道を歩ませられた。ある者を祝福して高め、

ある者を聖別して、みもとに近づかせられた。しかし、他の者をのろって、卑しめ、

彼らをその地位から退けられた。陶器職人がその手にある粘土を、

思うままに形づくるように、造り主は御手にある人間を、

思うままに裁かれる。善が悪と相対し、

命が死と相対するように、罪人が信仰深い人と相対している。

いと高き神が造られたすべてのものに目を注げ。二つずつどれもがそれぞれ対している。

× シラ書（集会の書）三三章七節以下

世の中は不思議で満ちています。日頃、当たり前と

思っていることの一つ一つが、そうではないのです。朝になれば東から太陽が出るということ。その理屈は誰でも知っていても、なぜそうなのか、と言うことは誰も知らない。また、いつでも、そうなるという保証は何もない。だのに、人は、その出来事に何の不思議も感じることなく、当たり前のこととして平然と過ごしている。

× 「いと高き神が造られたこの世のすべてのものに注意深く目を注げ！」とシラ書は、私たちに喚起する。「あたりまえではないのだぞ！」と呼びかける。

人は、設（しつら）えられた、この世の時と場に置かれ、それそれが生きることを許されている者です。空気も水も風も光も、自然の風景も……すべてが無償で平等に与えられている。そのような有り難き場で、人は好き勝手なことをしながら生きている。

人は、生きている様子を語り、あれこれと論じるが、生かされているその事実には無関心で、考え、語り、ましてや感謝することは無い。

× 「何よりも先ず、すべてを生かそうと、瞬時も休むことなく働いおられる大いなる命の神を知れ！」と、イエスは叫ばれた。人がそのようになるとき「この世のすべて、つまり、政治も経済も科学も、芸術も教育も宗教も、家庭も家族も仕事も、人間の精神も、男も女も、子供も大人も、老年も若人も、……自ずと正常になり、苦しんでも喜びが、貧しくても豊かさが、不便でも感謝と幸いとが得られるようになる」とイエスさまは示してくださいました。

× 何よりもまず、神の支配と神の義とを求めなさい。そうすれば、すべてのものが加えて与えられる。

× マタイによる福音書六章二三節

礼拝することの 大切さ

松下昌義

悪を行うな。そうすれば、悪はおまえを襲わない。

不正から遠ざかれ。そうすれば不正はおまえを避けるだろう。

不正の畑に種を蒔くな。七倍の不正の実を刈り取るだけだ。

ためらいながら祈ってはならない。
友人に偽り事をたくらむな。どんな偽りも口にしてはならない。

うそが身につくと、ろくなことにはならない。

旧約聖書統編

シラ書(集会の書)七章一節以下

これはたてまえの教えではありません。きれいな道徳訓でもありません。人間が生きて行くうえでの奥義を教えているのです。

「類は友を呼ぶ」と言います。また「同気相求む」とも言います。たしかに、似たものは自然に集まって仲間をつくります。「同気」とは同じ思いを持つということなのです。

思いとは念です。念とは「今の心」です。人の念は外目には見えませんが、念はエネルギーとして発せられ、同じ念を持っている者同志は共鳴するのです。たとえば、悪い念を持っていると、知らないうちに互いに集まり、その悪の念は一層大きく強く増幅され、その人達を金縛りにしてしまいます。

互いに異なる念は共鳴しません。たとえば、善い

念を持っている人は、悪い念に共鳴しません。ですから、自分と異なる念を持っている人の中にいますと、心からうちとけ合う事が出来ず苦痛すら感じるようになります。

人の念は変わることがあります。たとえば、いくら善い念を持っている人でも、強烈に悪い念の場面に自分の身を置いてしまうと、知らない間に悪の念に変えられてしまいます。「朱に交われれば赤くなる」といいますが、たしかに人はその交わる友によって善にも悪にも感化されるのです。

また「習性(ならいせい)となる」と言われますが、軽い嘘でも、それを言い続けていきますと、本当の嘘つきになってしまいます。初めは「悪い」と思っているうちに「当たり前」になってしまいます。念とはエネルギーです。この世はさまざまな念が錯綜している所です。ですから、自分の身心をどのような念の場所に置くかということはとても大切なことです。

わたしたちは、自分の念についてどれほどに気をつけて来たでしょうか。自分の外見に気を付けるのと同じように、自分の内の念の管理に気を付けねばと思えます。聖書の言葉は、道徳訓やたてまえを語っているのではなく、人間が人間として互いに喜びと安心を持って生きて行くための根本的な自分作りの奥義を示しているのです。

いつも大いなる命の神に、自分の念を向ける習慣を身につけましょう。その意味で、週の初めに教会の礼拝の場に自分を置くことの意義はとても大切なことです。

人の知恵と 神の智慧

松下昌義

不幸なめにあって、幸せを見つかる人もいれば、思わぬ幸運に巡り会って、損をする者もいる。送り主に何の利益にもならない贈り物もあれば、二倍になってお返しに来る贈り物もある。

名誉を求めて恥を受けることもあれば、無名の人が、一躍頭角を現す例もある。

わずかな金で多くの物を買ひ、後で七倍も支払う者もいる。

智恵ある人は、言葉が少なくても慕われるが、愚かな者は無駄なお世辞をふりまく。

分別のない者の贈り物は、お前に何の利益もたらさない。

けちな人間のしげしげする贈り物も同様である。彼は、自分が贈った物より更に多くのものを、期待しているのだから。

彼は、わずかな物を贈って、多くの小言を言い、町の宣伝役のように、その口を開く。

彼は、今日貸つけて、明日はその返却を迫る。こういう者こそ、憎むべき人間だ。

愚か者は言う。「わたしには友がない。親切にしたのに、何のお礼もしてくれない。」と。

愚か者のパンを食べる者は、彼の悪口を言い、なんと多くの人々が、しばしば、彼をあざけり笑っていることか。

彼は自分の物を正しい心で扱わず、他人の物も自分の物と区別しないのだから。

シラ書(集会の書) 二十章九節以下

X

X

知恵と知識とは違います。知識とは物事について理解した内容のことです。しかし、知恵とは物事の道理を弁え、正しく判断し、よく対応し処理できる心の働きのことです。ですから、沢山の知識を持っていても、物事を正しく判断し対応処理出来ない人がいるのです。知識は大切ですが、もっと大切なことは知恵です。

X

X

世の中には、自分の損得だけを考えて生きる狡猾な知恵者がいます。しかし、このような狡猾さには多少の差はあっても、結局、どの人も狡猾な知恵の持ち主です。聖書はそのような人間一般を「肉の人」と言い、その知恵を「この世の知恵」と称しています。

X

X

聖書が教えている知恵は「神の智慧」です。神の知恵に目覚めた人は、目に見えるこの世がすべて、目に見えない大いなる命、即ち神さまの命のお支えによって存在している、という根源の命の道理に気づくのです。そして「わたしが生きているのでなく、神に生かされている者がわたしです」と言える人になります。

このような、神に生かされている自覚は、人や物に対して感謝する心を持たしめ、「人生には、さまざまに苦しみ、哀しみがあっても、生きて行ける」という安心と勇氣とを与えてくれます。

安心と感謝と勇氣、そこから人間の幸いが生まれて来るのです。このように神の智慧は、生きる根っこに働く命の道理と愛に目覚めさせてくれます。

聖書は神の智慧を証している書物です。



悪い者から救って下さい

松下昌義

わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。

— マタイによる福音書六章十三節 —

次のような警告が聖書にあります。

身を謹んで目を覚ましていなさい。あなた方の敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食いつくそうとして探し回っています。

— ペテロへの手紙 I、五章八節 —

この世だけに生きている人は、この世の悪だけに目を向けます。しかし、神を仰いで生きている人は、この世に悪をもたらず悪魔の力に目を向けます。

近代人には「悪魔」という言葉は異様に聞こえ、それを語る者を変な人だと思えます。たしかに「悪魔」という言葉は軽率に語ってはいけません。でも、悪魔が働いたとしか思えないような恐ろしい事が私たちの社会で起こっていることも事実です。

聖書が悪魔とか「悪い者」とか言う場合の「悪い」とは、基本的には神さまとの関係で語っているのです。つまり、神に心と身体を向けようとする者を、この世の事だけに関心をもつように変えてしまう働きを「悪い者」と言うのです。

人間が作る善悪は、その時代によって移り変わります。人の心もころころと変わります。世間で善い人だと思われている人が、とんでもない不正や悪事をしていたり、聖人のような顔をしている人が詐欺師であったりすることは、この世では日常の事です。

聖書は、悪魔は光の天使を装い、神に仕える者を装うことは常の出来事である、と教えています。— コリン II 一 一 一 四節 —

結局、悪の働きとは、人の心から神を畏れ敬う心を奪うことです。つまり、人を愛し、生きとし生けるものを憐れみ、生かされていることに感謝する心を失わせることです。

それにしても、日々の生活に於いて、生かされている自分の有り難さを思うときがどれほどあるでしょうか。愚痴や不満、批判や攻撃をつのらせるばかりです。また、権力や富を独占している人達は自分の享楽ばかりに熱心で、社会的な弱者に心からの愛など持ち合わせず、表面的な美辞麗句を並びたてるだけです。宗教もこの世の利益追求の手段にしかすぎず、すべてが悪魔の手に掌握されているような状況です。その結果みんなが本当の平安と喜びとを得ずに、不幸な人生をすごし、終わりにには失望の暗闇のなかへ吸い込まれてしまいます。

この世は悪が働くところですから、そこからだれも逃れることは出来ない激烈な世界です。だからこそ人は「誘惑に遭わせず、悪い者から救って下さい」と祈るのです。イエスは弟子に言われました。「シモン、シモン、悪魔はあなたを、小麦のようにふるいにかける。しかし、わたしはあなたのために信仰がなくならないように祈った」と。— ルカ 二二 章 —

神はすべての人が栄光ある命に生き抜く事を願っています。常に勇気を出しましょう。あきずに善を行うようにすれば、神は私たちと共にいてくださいます。



聡明な人は皆 智恵を知っている

松下昌義

口を開く前に、よく考えよ。

病気になる前に、養生せよ。

裁きが来る前に、自らを考えよ。

そうすれば、神が訪れる時、お前は救われる。

病気になる前に、自らへりくだれ。

罪を犯したときは、改心の態度を示せ。

誓いは、必ず、期間内に果たせ。

これを果たすことを、死ぬるときまで延ばすな。

お前が死ぬ日に下る神の激しい怒りを思え。

その報復のときを心に留めよ。

そのとき神は御顔を背けられる。

豊かなときには、飢饉のときを思い、

富んでいるときには、貧乏なときを思え。

早朝から夕方へと、時は移り、

すべては、神の前で、速やかに過ぎ去る。

知恵ある人は、すべてに用心深く、

罪がはびこっているときには、過ちを犯さないよう気をつける。

聡明な人は皆、智恵を知っており、

知恵を見出した人に敬意を払う。

唯一の神に信頼することは、

空しいものと死者に執着することにまざる。

シラ書(集会の書)十八章一九節以下

×

シラ書は「格言集」の部類に属するもので、生き

る知恵と指針とを語っているものですが、その内

容は、世間の一般常識を語ったものでなく、その

語りには、常に、人生の背後で息づいている神の

確かな命と、その働きに思いを向けつつ語っています。

たとえば、「口を開く前に、よく考えよ。病気になる前に、健康によく配慮せよ。」と語ると同時に、来るべき人生最後の、神の裁きをよくよく心得て生きることを勧めています。

また、傲慢な生き方を打ち砕かれる身体の病に伏す前に、謙虚を身につけて生きよ、と勧めると同時に、

神の前に罪を犯すような事柄には、自ら避け、やもなく犯したときには、すみやかに改心する謙虚さを忘れるな、と勧めます。

また、満ちたれる日には空腹の時を思い、富んでいるときには貧しさと乏しきを思い、その富と豊かさ

にある自分を神に感謝せよ、と勧めます。

また、すばやく過ぎ去る一日を生きている中で、自分の

人生も同じように過ぎ去ることを、神の前で覚えよ、

と勧めます。それは、人生の日々を、神の前に感謝して過ごさない、ということなのです。

最後に、「神に信頼することは、空しいものと、死者とに執着することにまざる」と、結びます。

×

このようなシラ書の格言は、人生の表むきの「きれ

いごと」を語り、勧めているものではありません。どの

人も結局「自分の蒔いた種は、最後に、神の前で刈り

取るところになる」のです。これは、脅し(おどし)や

ことさらに恐怖心をおおりに立てての宗教的な語りではなく、シラ書の著者が、それまでの多くの先人達から

引き継いだ秘儀とも言うべき、人生の事実を語っているのです。

彼は言う。「聡明な人は皆、智恵を知っている」と。

空しいものに振り回される人生であってはならない

とおもいます。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×



信仰の知恵

松下昌義

集会の世話役に選ばれたら、有頂天になるな。客の一人として、皆と同じようにふるまえ。

彼らに心を配り、席に着け。

自分の任務をことごとく果たした後に着席せよ。

そうすれば皆の楽しみがお前の喜びとなり、事の運びが見事だというので誉れの冠を受ける。

年長者よ、語れ、それは当然のことだから。

若者よ、必要なときだけ話せ。

語るとしても二度、それを求められた場合のみ。

簡潔に話せ。わずかな言葉で多くを語れ。

大いなる人々の間では、出すぎた真似をするな。

年輪を重ねた人たちのいるところでは、やたらと無駄話をするな。

雷鳴が轟く前に稲妻が走り渡るごとく、

慎み深い人にその人望は先立つ。

潮時を見たら、席を立ち、ぐずぐずするな。

家では楽しく過ごせ。したいことは何でもせよ。

しかし、高慢な言葉を吐いて罪を犯すな。

これらすべてのことに加えて、

その賜物によって歓喜を酔わせる神を賛美せよ。

— シラ書 (集会の書) 三二章一節以下 —

×

本来、信仰は生活の知恵を生み出すものです。生活の知恵の基本は“慎み”です。慎みとは、自分を弁え、相手に敬意を表し、周囲に配慮する知恵をもつことです。

冒頭のシラ書は、生活の知恵の一つである「集いの

世話をする人」の心得を語っています。

まず、世話役に選ばれた者は「有頂天」になるな、と教えています。「自分を高しとするな」という意味です。そして

世話役はその集いが願う目的を、十分に果たせ、参加者が喜びを持って帰っていただけるように配慮せよ、と言います。

その他、人生の経験と、それによって得た善く生きる知恵

とを身に着けている年長者に多くを語らせよ、と言い、その

ような場での若者の処し方を示しています。

×

集いの世話役は、自分の意見や考えを主張してはなりません。多くの人たちに思いを語らせ、その集いが願っているところへ導く配慮をする事が務めです。世話役が自分の思いを持ち出して、集うている者と議論するなどは絶対に慎むべき

です。集うている人たちが互いに語り合えるように行司役として配慮するのが務めです。

集うている人たちは様々です。時と場との状況を弁えず、

自分勝手な発言をする人が必ずおられます。そのとき世話役

は知恵深くそれらの発言を、集いの願いに沿って、対処する

配慮の知恵を働かせなければなりません。個人の思いのまま

を自由に語らせるだけでは、その集いを混乱させ、愚かで実

の無い議論の場となり、後には不愉快だけが集う人々の中に

残るだけです。人々は二度とその集いには来ないでしょう。

求道する者たちの集いの願いは靈魂の喜びと神を賛美する

ことを共有することであって、ただお喋りをして評論することではありません。

信仰者は信仰の理屈に依り頼み、その独りよがり

に生きる者ではありません。信仰者は真実を求道する者です。喜びと

安心と感謝をもって他者と共に生きるための配慮の知恵(愛)

を身につけていたいものです。



思いが固まると形(もの)になる

松下昌義

こころの状態で、人の顔つきは変わる。うれしい顔にもなれば、悲しい顔にもなる。晴れやかな顔は、良い心の表れである。

シラ書(集会の書) 十三章二五節以下

「こころ」が動く、「さまざまな思い」になります。たとえば「考えるこころ」「怒るこころ」「悲しむこころ」「愛するこころ」……。そして、そのような「思いが固まると形になる」のです。たとえば、怒る思いが固まりますと、恐ろしい顔となり、声も荒々しくなり、体全体が攻撃的な行動になってしまいます。悲しい思いが固まりますと、悲しい顔つきになり、声も弱々しく、体全体から力が抜けて、うなだれの姿になります。喜びの思いが固まりますと、顔は明るく笑顔となり、声にもはりがあり、体全体が活き活きとしてきます。

このように、その人の「こころ」がどのように動くかによって、「思い」は変わり、さらに「思いの凝縮した」状態が形となり、表情や行動となって来るのです。

その意味で「形」とは、心が動き思いとなり、その思いが凝縮(強く固まった)した物だと言えます。それが証拠に、ストレスという思いが凝縮しますと、胃に穴があいたり、頭のかみの毛に円形の禿が生じたり、心臓の発作が起こったりするストレス性の心身症が現れてくるのを、今は誰も

が知っています。ですから、わたしたちは自分のこころをどのように動かすかということの管理は、とてもたいせつです。

でも、こころは自分勝手に動くものではなく、何かに関わることによって動くのです。

旧約聖書創世記の楽園に登場するアダムの子エバは、園の中央にある禁断の木の実を見ると、「それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた」(創世記三章六節)と。

木の実を見てこころが動き、食べたいという思いが凝縮して、女は、手を、体を動かして木の実を取って食べ、夫にも与えたのです。

こころが動き、思いとなり、それが凝縮すると、誰も止められません。思いにその者の全体が引っ張られてしまうのです。

その意味で、わたしたちの「こころ」がどのようなことに関わりを持つか、ということとは、極めて重大なことなのです。創世記は、人は「神と相対して造られた」と記しています(世記二章二六節以下)。今、あなたは、神と相対しているでしょうか。相対するとは、深く人格的な交わりの事です。

それにしても「何かに関わり、こころが動き思いとなる以前の、こころ」はどういう状態だったのでしょうか、ここでは、紙面の都合で、残念ながら私見を語る事ができません。この機会に皆さんおひとり、おひとり、考えてください。その作業はとても楽しいと思います。

理屈をこねるな 見栄はるな

松下昌義

仕事をするとき、理屈をこねるな。
困っているとき、見栄をはるな。

働いて、すべてに満ち足りている人の方が、
パンを得るでだてを持たず、見栄をはって
生きる人にまさる。

子よ、慎み深く、自らに誇りを持ち、自分
を、あるがままに、正しく評価せよ。

自分自身を汚す者を、だれが正しい人と認
めてくれるだろうか。

自分自身を軽んずる者を、だれが重んじて
くれるだろうか。

旧約聖書続編

シラ書(集会の書)十章六節以下

「理屈をこねるな」「見栄はるな」。これだ
けで、大切な生き方の心得を教えていただいた
ような気がします。

見栄をはるとは、他人や世間の思惑を気にし
て、自分を自分以上の者のように見せかけ、こ
つまりイイカッコシイのことで、
また、理屈をこねるとは、深く物事を考え
るな、ということではなく、自分勝手な講釈(こ
うしゃく)をぶつくさ言うことだ、とすれば、
シラ書が、人間の生きる心得として語っている
ことは、なるほど、と共感できます。

たいていの仕事は、手足を使って実際に行っ
て見なければ分ならず、それを行ってこそ、そ
の事の素晴らしさ、苦しさ、意義というものが

理解できるのです。だのに、行う前から、いろいろ
と理屈をつけ、ことの善し悪しを論じることは、愚
かなことです。本来、仕事というものは理屈を言わ
ずに行うものであり、その結果しかるべき判断を下
すことが大切だと思います。

また、見栄をはることによって、人々の信頼を失
い、嘲笑されるということは、どこでも見ることが
できます。だからこそ、シラ書は「慎み深く、自
ら誇りを持ち、自分があるがままに正しく評価し、
自分で自分自身を汚し、軽んじるような愚かなこと
をしてはならぬ」と教えます。

シラ書は、神さまがくださる「信仰の知恵」の書
です。神さまの前で生きる生き方の心得を示してい
るのであって、世間の人の前で生きる心得ではあり
ません。

神さまが教えて下さる生き方とは、「あなたは、
わたしの前では、とても価値ある素晴らしい『あな
た』なのです。他の人と比べて、喜んだり悲しんだ
りするような生き方をする必要はありません。あな
た自身を大切に、どんな時も、神さまの導き覺
えて、自信と安心とをもって、あなたを輝かせなさ
い。わたしはあなたを守り支え、はげまします」と
いう神さまの声をいただいて生きることです。

両足で大地を踏みしめて歩き、心をもって天国に
すみなさい。もし自分のつとめをよく果たしたいな
ら、まずそのつとめを愛しなさい。謙遜で愛情深い
人は、皆から愛され、神からも愛され、周囲の人に
慰めと勇氣とを、あなたは知らぬうちに与えている
でしょう。

忍の一事は衆妙の門

松下昌義

不当な憤りには、弁解の余地はなく、理不尽な憤りは、身の破滅を招く。

辛抱強い人は、時がくるまで耐え忍ぶ、耐え忍んだ後には、

気分が晴れて爽快になる。

彼は語る時がくるまで、口を噤む。

多くの人々は、彼の思慮深さを伝え広める。

旧約聖書統篇

シラ書(集会の書)一章二三節

「忍耐」とは、ただ耐えるだけでなく、正しくものごとに対処することです。ですから物事に正しい知恵をもって対処することを忍耐力を働かせるともうします。

耐える事が出来ない者は、ものごとに正しく対処する智恵を持っていないものです。そのような人は、問題をさらに大きくしてしまいます。

忍耐には後悔はすくなく、慎みのない怒りは多くの後悔を残します。軽率な怒りの後に残る後味の悪さ、忍耐していればよかったと嘆き悲しまなくてすんだのと思う。

忍耐は知恵のしるしであり、慎みの無い言動は無知のあらわれです。忍耐は力であり、忍耐力を失えばあらゆる仕事の成果は半減するでしょう。

「忍(耐)の一事は衆妙の門」と言うことわざ

があります。衆妙の門(しゅみょうのもん)とはすべてのすぐれた道理の入口である、と言うことです。すぐれた道理の入口とは、物事を行うに際しての当然の出発点である、ということです。ですから「忍(耐)の一字千金の法則」だと他のことわざは言います。

新約聖書も忍耐の大切さを教えています。

「苦難は忍耐を、忍耐は練達(円熟した人格)を、練達は希望を生むということ。希望は失望に終わることはありません。」—ロマ五・三一

「いろいろ試練に出会うときは、この上ない喜びとしなさい。信仰が試されることで忍耐が生じる……あくまでも忍耐しなさい。そうすれば円熟した人になります。」—ヤコブ一・一二

忍耐の姿の一つは沈黙であります。言いたい事が山ほどある。腹のなかで憤りが煮えたぎる。どう考えても理不尽であると思う。そんなときこそ沈黙でありたい。忍耐力を働かさなければならぬ。そんなとき、沈黙を破り口を開くなら、必ず言いつぎる言葉が出てしまう。

忍耐は犠牲であります。犠牲を神は見ておられ、心ある人は知っている。彼は必ず神に祝福され、人に慰めと勇氣と希望とを与える。

おだやかな心は肉体を生かし、激情は骨を腐らせる。柔らかな応答は憤りを静め、傷つける言葉は怒りをあおる。知恵ある人の舌は知識を明らかに示し、愚かな者の口は無知を注ぎだす。

旧約聖書 箴言十四書

生きる喜びが 生まれて来る

松下昌義

智恵ある統治者は、その民を教育し、
聡明な人の政治は、秩序あるものとなる。
公務に携わる人たちは、民の統治者に倣い、
町の住民は皆、その首長に倣う。

教養に欠けた王は、その民を滅ぼし、
実権を握る者の聡明さは、町を立派に築く。
この世の主権は、神の御手にある。
神は、時に応じて、相応しい人物を起こさ
れる。

人の成功は神の御手にある。
立法者に栄誉を与えるのも、神である。

旧約聖書続篇

シラ書(集会の書)十章一節以下

前記のシラ書を読みながら、以前に、何かの書
物で読んだ、情景を思い出した。

昔、日本の為政者がヨーロッパにもむき、その
国の要人としはし敏談の時を持ったおり、「わたし
には何も畏るべき者はいないが、ただ神だけに
は畏れをいだいている。」と語る要人の言葉に、
かの日本の為政者、「我は、その神をも恐れな
い」と、胸を張って語ったとか。

X

X

ここで、どちらの国の為政者が立派か否か、と
いうことを語ろうとは思いません。言いたいこと
は、その人間個人の生き方のことです。つまり自
分の人生と自分の仕事に、その人がどのように向
き合っているか、ということなのです。

「我は、神をも畏れない」という言葉は、人間が胸
を張って語ることではない、と思えます。

X

X

神を畏れるとは、人間の知恵や能力を超えたもの
に、畏敬の念をもつことであり、謙虚さをもってす
べての事をなす、ということなのです。

私たちの人生の主人は、自分自身ではありません。
どの人も自分で生きているようで、その実、生かさ
れて生きている者です。自分の命の根っこは自分で
はなく、神なのです。この人生の秘密に気づいた者
だけが本当の「謙虚さ」をもつことができます。そ
れは同時に、自分の人生に安心を得ることになるの
です。なぜなら、自分の命の本当の拠りどころに気
づいたからです。

神よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っ
ておられる。座るのも立つのも知り、遠くから
わたしの計らいを悟っておられる。立つのも伏
すのも見分け、わたしの道にことごとく通じて
おられる。わたしの舌がまだ一言も語らぬ先に、
神よ、あなたはすべてを知っておられる。……ど
こに行けば、あなたの霊から離れることができ
よう。どこに逃れば、御顔を避ける事ができ
よう。天に登ろうとも、あなたはそこにいます、
陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそ
こにいます。曙の翼を駆って海の中に行きつこ
うとも、あなたはそこにいます、御手をもって
わたしを導き右の御手をもって私しを整えられる。

旧約聖書詩編一三九編

神を畏敬するとき、その人の内から、「人生は
つらい、しかし私は、生きて行ける、生かされても
らえる」という喜びが必ず生まれて来るでしょう。



神こそ最善の友

松下昌義

向こう見ずな人間と一緒に旅をするな。お前はひどい災難に悩まされないと何かぎらしない。彼は勝手気ままにふるまい、その愚かな行動がもとで、お前も一緒に命を落とすことになる。

短気な人間と争ったり、一緒に荒野を歩いたりしてはならない。彼は血を流すことなど何とも思わず、だれの助けも得られないところで、お前を打ち倒してしまふから。愚かな者と相談するな、彼は秘密を守ることができないのだから。内密にすべきことを他人の前で公にするな。どんな結果が生じるか分からないからだ。

相手構わず、人に心を打ち明けるな。また相手構わず、人から恩を受けるな。

旧約聖書統編

シラ書(集会の書)八章一五節以下

人は自分の身を置く環境によって育てられます。人にとって最も感化を与える環境は人です。どのような人の下で育ち、どのような人と交わるかによって、その人はそれに相応しく育ちます。

怒りやすい者の友となるな、
激しやすすい者と交わるな。

彼らの道に親しんで、あなたの魂を畏に落とすしてはならない。

旧約聖書箴言三二章二四節

この世で最も偉大な富とは自分の靈魂に安らぎを与える神です。生まれる前から、生まれ死ぬまで、さらに死んだ後までも共にいて下さる真実の友は神だけです。

目に見えない神への畏敬を絶えずこの内の持ち、そこで平安と希望と喜びを得て生きるなら、それこそ最大の幸福です。先ず神を友にしよう。

神を畏敬し善を行う友の中にいれば、気づかないうちに、はげまされ長く生きる智慧を身につけることができるでしょう。

この世で最も信頼できる友は神です。苦しみも悲しみも喜びも、先ず神に語り、目の前の友に語るように相談しよう。また、自分の内に秘密があるなら包み隠さず全てを打ち明けよう。神は優しく聞いて下さる。

神を畏敬し、神に親愛の情をもって生きる者に、神は必ず、ときに相応しい友を遣わして下さる。

求めなさい。そうすれば与えられます。神の門をたたきなさい。そうすれば、開けてくださいます。

救い主である神は、神を愛する人と共に働き、その人を聖め、その人の靈魂の救いに役立つことを、日々そなえてくださいます。

「あなたが行う善について、また、あなたが行う悪について、人々があなたに言うかも知れないことではなく、神があなたにいわれることに心をとめよう。」



人の行いは 神の前にあらわ

松下昌義

人々の行いは、神の前に
太陽のようにあらわであり、
神の目は、絶えず彼らの歩みに注がれている。
彼らの不正は、神から隠されることなく、
そのすべての罪は、神の前にあらわである。
しかし、神は情け深く、
お造りになったすべてのものをみなわし、
見捨てたり、見殺しにしたりはせず、
大切に慈しまれる。
人の行う施しは、
神にとって、印章のように貴重であり、
人の親切を、
神は、ご自分の瞳のように大事にされる。
神は、ご自分の息子や娘たちに、
悔い改めの心を分かち与えられる。
最後に、神は、立ち上がって人々を裁き、
行いに応じた報いを彼らの頭上に下れる。
悔い改める者には、立ち帰る道をひらき、
耐える力を失った者を励まされる。
—シラ書(集会の書)十六章十七節以下—

世の中の人に於いてもそうなれば、ましてや神の前に
あって、人の行いは、太陽のようにあらわです。
誰も見ていない、知ってはいまい、と思っても、
神の目は絶えず、私達、ひとりひとりの歩みに注がれて
います。誰も知らないと思っているのは、その当人だけ
です。神を畏敬する人はつぎのように告白します。

神よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられ
る。座るのも、立つのも知り、遠くからわたしの計ら
いを悟っておられる。
歩くのも、伏すのも見分け、
わたしの道にことごとく通じておられる。
わたしの舌がまだひと言も語らぬ先に、
神よ、あなたはすべてを知っておられる。
前からも後ろからもわたしを囲み、
御手をわたしの上においてくださる。
どこに行けばあなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れば、御顔から避けることができよう。
天に登ろうとも、あなたはそこにいますし、陰府に身を
横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。
曙の翼を駆って海のなかに行き着こうとも、あなた
はそこにいますし、御手をもってわたしを導き、
右の手をもってわたしをとらえられる。

—詩篇一三九篇—
人はひそかに語り、互いに忍びわらいをする。しかし
神は、見捨てたり、見殺しにせず、大切に慈しまれる。
悔い改める心をあたえ、涙して待つておられる。
苦難と死の陰の谷のなかを歩もうとも、神は夜も昼も
光を注ぎ照し見守っておられる。
誰も滅びの冥に嵌ま^はってはなりません。どの人も神の
祝福のうちに永遠に喜び生きる事を願っておられる。



虚仮なる人生 の中にも有って

松下昌義

子よ、神に仕えるつもりなら、自らを試練に向けて備えよ。

心を引き締めて、耐えしのべ。

災難のときにも、取りみだすな。

神によりすがり、決して離れるな。

そうすれば、豊かな晩年を送ることになる。

身にふりかかる艱難は、すべて甘受せよ。

たとえ屈辱を受けても、我慢せよ。

金は火で精錬され、

人は屈辱のかまどで陶冶され、

神に受け入れられる。

病気の時も、貧しいときも神に寄り頼め。

神を信頼せよ。必ず助けてくださる。

お前の歩む道を一筋にして、神に望みを置け。

— 旧約聖書統篇

シラ書（集会の書）二章一節以下—

聖書が言う試練とは、人生において最も確かな神の愛を弁え知ることです。

× × ×

世間は虚仮。虚仮（こけ）とは、表面だけもつともらしく見せかけるといふことです。我も人も誰もが悲しい憂き世に憂き身をさらして虚仮を生きています。

虚仮にどっぷりつかって、人を騙して生きる人。世間の虚仮を笑い、虚仮を楽しんで生きる人。虚仮を正すために情熱をかたむけて正義を叫ぶ人。しかし大方は、虚仮と知りつつ、どうすることも

できないままで、これが世間だと諦めて生きています。しかし、いずれにしても、結局どの人も虚仮に埋没し虚無で人生をおわります。

× × ×

ここに、世間の虚仮に居直りもせず、否みもせず、諦めもせず、虚仮を通してその向こう側に確かな世界、安心の世界、希望の世界を見知して生きている人がいます。冒頭の信仰の人がその人です。彼は言います。「人よ、神の変わらぬ真実に眼を開かれないと願うなら、自分自身を試練に向かつて備えよ」と。人の世の虚仮という現実から透けて向こう側に確かな命の輝きが見える、と言うのです。だから「己が身にふりかかる艱難も甘受せよ」と。それは、金が火で精錬されるように、人は屈辱のかまどで陶冶（きたえられる）ことで永遠の平安を見る事が出来るからです。

× × ×

これは人生の弱者の言い逃れ（ルサンチマン）ではありません。彼は、不条理と偽善、利己主義と暴力とに満ちた虚仮なる世のただ中で、唯一信頼出来る神の愛が、自分の身に熱くそがれていることを信仰によって知っています。

だから彼は、力むことなく言います。

神を信頼せよ。そうすれば必ず助けてくださる。お前の歩む道を一筋にして、神に望みを置け。— 六節—

× × ×

虚仮なる世の中にあって、唯一信頼できる神の愛を見つめて生きる人は幸いです。

× × ×



友を見出せば

宝を見つけたも

同然だ

松下昌義

のどの麗しい声は、友人を増やし、舌のさわやかな語りかけは、愛想のよい返事を増やす。多くの人と親しく挨拶をかわせ。だが、相談相手は千人のうちの一にだけに限れ。友をつくるときは、ためしてからにせよ。すぐに彼を信頼してはいけない。都合のよいときだけ友となり、苦難のときには、離れてしまう者がいる。また、心変わりして敵となる友もいて、争いでお前の吐いた悪口を暴露する。誠実な友は、堅実な避難所。その友を見いだせば、宝を見つけたも同然だ。誠実な友は、何ものにも代え難く、そのすばらしい値打ちは計り難い。誠実な友は、命を保つ妙薬。神を畏れる者は、そのような友を見いだす。神を畏れる者は、真の友情を保つ。友もまた、同じようにふるまうから。

旧約聖書統編

シラ書（集会の書）六章五節以下

だれもか真実の友人をもちたいと願っています。シラ書は、本当の友情を次のように語っています。

誠実な友は、堅実な避難所。

その友を見出せば宝を見つけたも同然だ。

誠実な友は、何ものにも代えがたく、

そのすばらしい値打ちは計り難い。

誠実な友は、命の妙薬

×

×

なぜ人は友を求めるのでしょうか。それは人間は独

りでは生きて行けないからです。どうしても友が必要です。聖書は、神さまが人間を創造された様子を物語りとしてつぎのように記しています。

神は土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた、こうして生きる者となった。……神は言われた。

一人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。……

創世記二章六節以下
この物語は人と人との関わり方の基本を示しています。人は人との「助け合い」によって人へと成長して行くように、神によって造られています。ですから、友が必要なのです。「友」という漢字を字通で見ると、タスケル、ワカツ、マジワル、ナラウ、シタシム等と読むとありました。

×

×

しかし、そのような友を見つけ、その友といつまでも友情を保つことは難しい事です。でも、そのような友との出会いが得られないのは、ひよっとすると自分自身の方に責任があるのではないかと反省してみることが大切です。

のどの麗しい声は、友人を増やし、舌のさわやかな語りかけは、あいそのよい返事を増やす。……神を畏れる者は、そのようなよい友を見いだす。神を畏れる者は、真の友情を保つ。同じようにふるまうからだ。

人生に於いて友に出会うことは宝を見つけたも同然です。しかし、本当の宝は永久に変わらぬ真の友に出会うことです。イエスは言われた。

あなた方はわたしの友である。もはや、わたしはあなた方を僕とは呼ばない。友と呼ぶ。

ヨハネによる福音書一五章一二節

あとがき

私は、みちしるべ冊子を拝読していて、教訓や戒めを学ぶことより「温かさ」を感じていることに、何故なのだろうと不思議に思うことがありました。ある日、礼拝の朝に松下牧師が「命の滾りは私たちの足下に有る。触れると温かい」と言葉されるのを聞いた時にこの「温かさ」は此処から派生し、波動している、天然自然のぬくもりなのかもしれないと気が付かされました。

私達の喜びや哀しみと共にあるみちしるべ誌が広く多くの皆様に読み継がれてゆくことを願っています。

み言葉を取り次いで下さいます松下昌義牧師と松下温子先生に私達は深く感謝し、神様の祝福をお祈り申し上げます。

二〇〇三年九月四日

林 順子

みちしるべ文庫 三二一

『知恵それは神の息づかい』

二〇〇三年九月四日 発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会

京都市左京区下鴨南茶の木町二九

電話 〇七五―七八―九六四〇